

輪島塗関係者へのヒアリング調査結果 および輪島塗の復興計画

輪島塗復興協議会

金沢大学・神奈川大学・岡山大学合同調査チーム

令和8年2月28日

輪島塗復興協議会の概要

- 名称 輪島塗復興協議会
- 住所 石川県輪島市河井町 3-103
- 設立日 2025年1月1日
- 目的 輪島塗復興のため

事業について

- 輪島塗復興に関する事業
- 企業や金融機関との連携事業
- 輪島塗関係者に対し公平に利益享受を行える事業
- 輪島塗発展に関わる事業
- そのほか、協議会の目的を達成するために必要な事業

構成員について

- 理事名簿
- 理事長 大工 治彦 (有限会社 蔦屋漆器店)
- 理事 浦出 真由 (ヌシヤ株式会社)
- 理事 中島 悠 (中島忠平漆器店)
- 理事 水尻 直子 (Maison Mizushiri)
- 運営事務局
- 事務局 竹原 淳
- 事務局 小林 将
- 事務局 水尻 幸太 (Maison Mizushiri)

三大学合同調査チーム

- 金沢大学理工学域地球社会基盤学類 建築計画研究室 教授 西野辰哉
- 神奈川大学建築学部建築学科 建築保存活用研究室 教授 野村 和宜
- 岡山大学大学院環境生命自然科学研究科 建築設計学研究室 准教授 川西 敦史

輪島塗に関しては、関連諸団体によって（仮）職人養成所整備計画、海外展開支援などの支援活動があります。本協議会は、他主体の支援活動と相互補完的となるように活動して参る所存です。

ヒアリング調査にご協力頂きました職人や塗師屋の方々、本協議会の活動にご理解とご協力を頂きました石川県商工労働部、輪島市、輪島漆器商工業協同組合、能登官民連携復興センターに感謝申し上げます。

Executive Summary

第一部 序

令和6年1月1日の能登半島地震及び同年9月21日の豪雨災害は輪島塗産業にも甚大な被害をもたらしました。輪島塗に関わる多くの職人や事業者が、工房や道具、仕事の場を失いました。この困難を乗り越え、輪島塗の伝統と誇りを未来につなげるために、輪島塗の若手の塗師屋や職人が中心となって、令和7年1月「輪島塗復興協議会」を設立しました。その目的は、職人や関係者の声をもとに復興計画を策定し、協力体制を強化して、輪島塗の再興とともに、漆芸の伝統的技術を次世代へと継承していくことです。

第二部 三大学調査：輪島塗関係者への調査からみえてきた輪島塗復興の課題と示唆

今次災害後の生活および生産上の困りごとや輪島塗産業の復興に向けた意見を収集するため、輪島塗関係者71名（職人・塗師屋・組合・研修生・作家など）を対象として、金沢大学、神奈川大学、岡山大学の協力の下、ヒアリング調査を行いました。その結果、輪島塗復興に関する課題は<震災によって発現した課題>と<震災前からの構造的課題>の大きく二つに分類されました。前者は生活および生産環境の被害、職人や作家の輪島からの離散、漆芸関連原料・道具などの調達困難などです。後者は主に後継者不足と売上額低下です。輪島塗復興のためには、1)輪島塗の販売売上額の向上、2)職人工

賃の適正化、3)供給体制の再構築、が大きな目標となります。また大学調査により、輪島塗の生産環境の物理的特徴も明らかになりました。

第三部 協議会：輪島塗の復興のため何を行っていくか-輪島塗復興アクションプラン

輪島塗と漆芸の技術・文化・産業の集積地である強みを活かして、次代に輪島塗を持続可能にしていくため、当協議会が「生産・育成・デザイン・販売」を一体で支える中間支援組織として機能して参ります。行政・企業・職人・大学などとの連携を通じて、輪島塗の文化と産業を再構築する「共創型復興モデル」を確立して参ります。

- ①: 人と人をつなぐ仕組み（リクルート・育成・継承のマッチング）の構築
- ②: 新たな職人育成の機会としくみを創設
- ③: IP（アニメ・キャラクター・ブランド）を活用した新漆芸品を企画販売
- ④: 全国の美術系大学と連携してデザイン力強化と全国的交流
- ⑤: 企業と連携して若手の販売会を開催して売れ筋などの実証事業開催
- ⑥: 若手職人のための職住近接型「シェア工房+住宅」を整備

これらは「リクルート→育成→制作→販売→改良」という一連の循環となって、輪島塗の復興をサポートします。このプロセスに現在の職人にも主体的にご参画頂きながら、若手育成と市場開拓を同時に推進できる持続的な体制を目指します。当初より計画してきた輪島塗復興協議会基金を技術継承や指導謝金等の主要財源の一つとします。

目次

第一部 序 P.7

第二部 三大学調査：輪島塗関係者への調査からみえてきた輪島塗復興の課題と示唆 P.8

2-1.職人ヒアリング調査からみえてきた輪島塗復興の課題（金沢大） P.8

2-2.輪島塗の生産構造と「塗師屋造」（神奈川大） P.24

2-3.輪島塗における工程別の工房空間と作業環境特性（岡山大） P.39

第三部 協議会：輪島塗の復興のため何を行っていくか- 輪島塗復興のアクションプラン

P.48

3-1.輪島塗復興にむけての協議会の活動理念 P.48

3-2.重点アクションプラン:職人支援の強化—技術継承と報酬体系に関する基本方針

P.48

3-3.輪島塗復興の課題とアクションプラン P.50

3-4.輪島塗復興アクションプランのスケジュール P.54

第四部 資料編 P.55

4-1.輪島塗復興協議会×金沢美術工芸大学ワークショップ報告(251120) P.55

4-2.輪島塗復興協議会×多摩美術大学ワークショップ報告(260109) P.63

4-3.歌舞伎座展示会実施報告および来訪者アンケート結果(260110-11) P.73

4-4.輪島塗職人および関係者ヒアリング内容の要約に関しては資料請求を申込下さい

第一部

序

令和6年1月1日の能登半島地震及び同年9月21日の豪雨災害は輪島塗産業にも甚大な被害をもたらしました。輪島塗に関わる多くの職人や事業者は、工房や道具、仕事の間を失いました。

この困難を乗り越え、輪島塗の伝統と誇りを未来につなげるために、輪島塗の若手の塗師屋や職人が中心となって、令和7年1月「輪島塗復興協議会」を設立しました。本協議会では、輪島塗に関わる事業者・職人・関係者が横断的につながり、情報共有や意見交換を通じて、個々の取り組みだけでなく、輪島塗全体としての復興をめざす方向性をつくっていくことを目的としています。さらに、交流会や勉強会を通じて、具体的な復興プランを策定し、協力体制を強化、輪島塗の再興とともに、伝統技術を次の世代へと継承していくことを大きな目標としています。なお、本協議会は、輪島漆器商工業協同組合とも連携し、復興と再生を進めていきます。

主な活動は以下の通りです：

- ・地震で損なわれた輪島塗の生産体制の回復
- ・輪島塗の将来的な発展と持続可能な産業化
- ・技術継承・人材育成のための仕組みづくり
- ・復興支援に関する情報発信・広報活動

令和7年度には、主に下記の活動を行いました。

- ・輪島塗職人など関係者71名へのヒアリング調査（令和7年6月～10月）
- ・輪島漆芸研修所研修生とのワークショップ（令和7年9月5日）
- ・金沢美術工芸大学漆芸科学生とのワークショップ（令和7年11月20日）
- ・多摩美術工芸大学学生とのワークショップ（令和8年1月9日）
- ・東京歌舞伎座ホールにおける展示会（令和8年1月10,11日）
- ・協議会ホームページの開設

この輪島塗の復興計画書は三部構成となっています。まず第一部の序に続いて、第二部では、金沢大・神奈川大・岡山大合同調査チームによる輪島塗職人や塗師屋など関係者への直接ヒアリング調査からみえてきた輪島塗復興の課題と示唆を、そして、第三部では、本協議会による輪島塗復興のアクションプランをお示しします。

第二部 三大学調査： 輪島塗関係者への調査からみえてきた 輪島塗復興の課題と示唆

2-1.職人ヒアリング調査からみえてきた輪島塗復興の課題（担当：金沢大）

今次災害後の生活上および生産上の困りごとや輪島塗産業の復興に向けた意見を直接収集するため、輪島塗の職人や関係者を対象としたヒアリング調査を遂行しました。

2-1-1. 調査の方法

ヒアリング対象者は輪島塗の関係者 71 名（職人・塗師屋・組合・研修生・作家など）です。図 2-1.1 にヒアリング対象者の属性を示します。調査期間は令和 7 年 6 月末から 10 月初旬です。金沢大、岡山大、神奈川大の教員および学生と協議会メンバーがペアとなって、ヒアリング対象者の自宅や工房などにおいて対面方式で聞き取りを行いました。

質問項目は、主に今次災害での生活・生産上の被害、輪島塗産業持続のための構造的課題、作業空間の特性、ライフスタイル、今後の輪島塗産業の展開などについて、半構造的質問形式で聞き取りを行いました（表 2-1.1→p62）。

さらに、輪島漆芸研修所生、金沢美術工芸大学漆芸科の学生、多摩美術大学の学生と

のワークショップをそれぞれ9月4日、11月20日、1月9日に開催して、若い人々から輪島塗に関する率直な印象や将来的な関与の可能性などについて意見聴取しました。

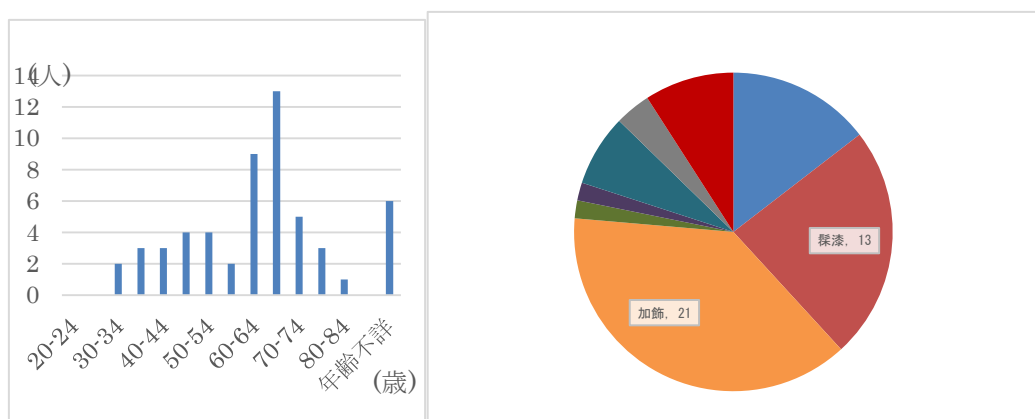


図 2-1.1. ヒアリング対象者の年齢層と職種

2-1-2. 結果：輪島塗関係者 71 名の「聲」

職人ヒアリングの文字起こしデータは膨大なページ数となるため、別添資料とします。また第四部に各対象者のヒアリング内容を AI によって 1 頁に要約したものを添付しました。

2-1-3. 考察：輪島塗の産業構造とその持続に関する課題

複数の輪島塗関係者へのヒアリング調査の結果をまとめると、輪島塗復興に関する課題は<今次災害によって発言した課題>と<災害前からの構造的課題>の二つに大別されます。<今次災害によって発言した課題>のいくつかは、<災害前からの構造的課題>が災害という出来事によって急激かつ集中的に発現したのものでもあります。したがっ

て、輪島塗復興のためには、＜今次災害によって発言した課題＞の解決のみならず、＜災害前からの構造的課題＞の解決が求められます。では、＜災害前からの構造的課題＞とは何でしょうか。職人ヒアリング調査結果をまとめると、輪島塗の現在の課題は、その産業構造に起因していると考えられます。図 2-2～2.5 に輪島塗産業の構造と課題を示します。

●1980 年代以前

輪島塗は、製品流通における顧客（寺社、頼母子講、問屋（百貨店））―塗師屋、生産発注における塗師屋（発注者）―一年季明職人（請負者）、そして、生産部門における徒弟制：親方―弟子の各関係が確立しており、それらの関係の上に生産体制が成立していました。職人は家業として親から子へ代々承継される場合が多々ありました。

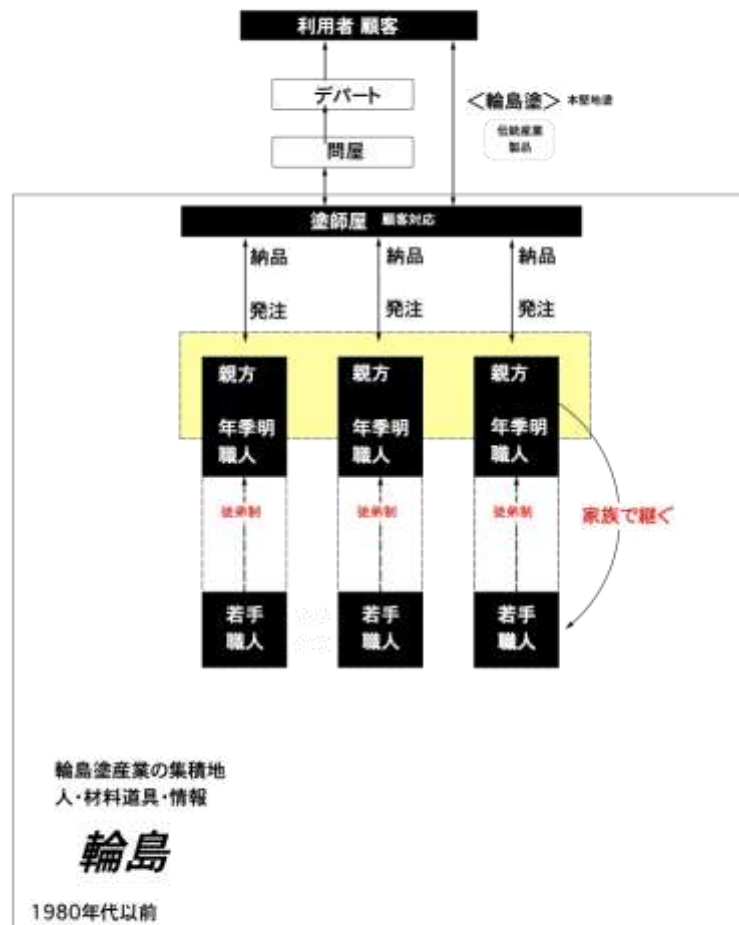


図 2-1.2. 輪島塗の産業構造（1980 年代以前）

●1990 年 バブル崩壊後

バブル後の 1990 年頃が輪島塗の売上額の最大期でした。その後、バブルの余韻が冷めた頃から需要と売上額が減少しはじめました。そのため、職人の親方側にも弟子を受け入れる余裕がなくなりはじめました。

●2009年 リーマンショック

このとき働き盛りであった20～40代の職人が大量に廃業して他業種に転職していき
ました。このことはその約15年後の現在、40～60代の職人の層が極端に薄い状況を生
み出す原因となりました。

<震災前からの構造的課題群>

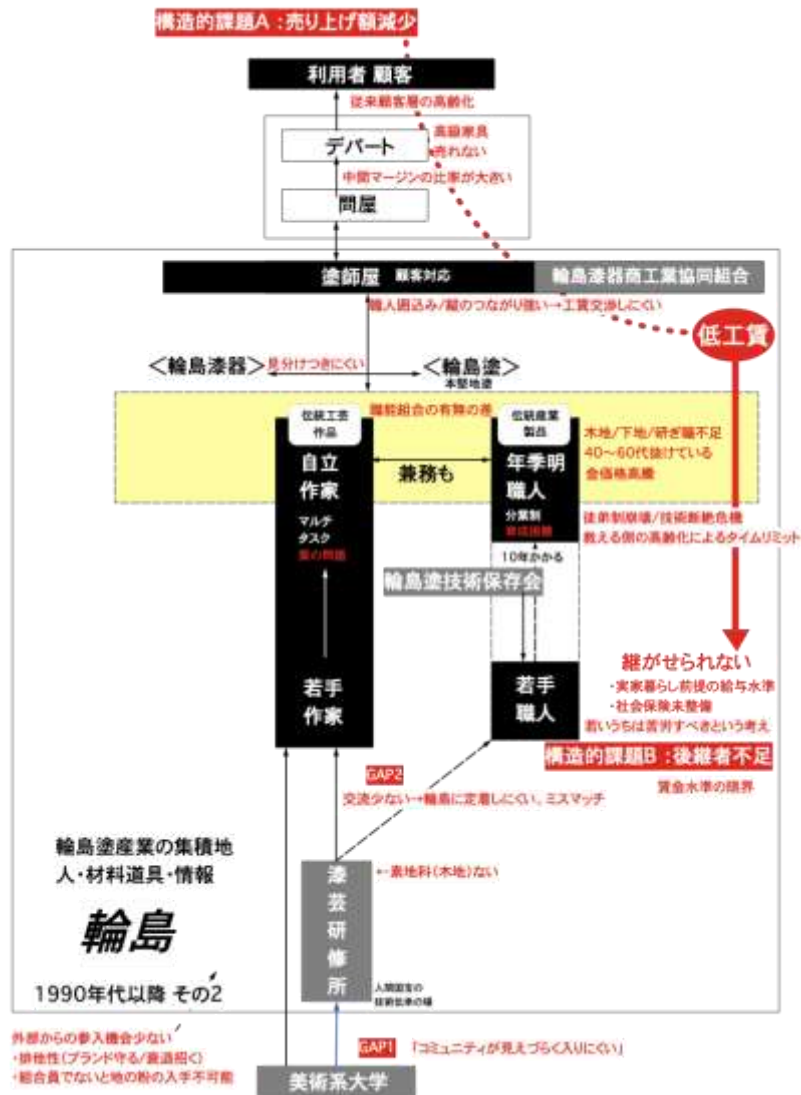


図 2-1.3. 輪島塗の産業構造と課題 (1990 年代以降)

・後継者不足：構造的課題 B

現在、40 代から 60 代までの職人層が極端に少なく、70 代以上の高齢職人の職人が大半を占めます。従来は、実子に継がせる場合も少なからずありましたが、職工賃が低賃金のため、子に職を継がせられない職人が増えた結果、若手の後継者が減少してきました。

とくに、木地、下地、研ぎ職は職人不足が顕著とされています。例えば、木地に関して、輪島漆芸研修所には素地科（木地）がなく、また、現在整備検討されている（仮）職人養成所にも木地用機械が設置されないという点がマイナスに影響するのではないか、といわれています。

また従来の徒弟制度は、技術継承の場として有効でしたが、もはや親方に経済的余裕がなく、弟子をとることが難しくなっています。元々、親子での承継も多かった職人の世界では、実家暮らしが前提の給与水準であり、弟子に現在水準の最低賃金を保証できないために成立しません。また社会保険の未整備も指摘されました。ある若手職人は、「輪島には、若いうちは苦勞すべきだ、という暗黙の共通認識がある」と言っています。

一方で、金沢美大生から「輪島のコミュニティが見えなくて入りづらい」という意見があるように、輪島外部からの参入のハードルは高い状態です。例えば、組合員でなければ、地の粉を入手できません。この排他性は輪島のブランドを守っている反面、衰退を招くのではないか、という意見もありました。

輪島漆芸研修所は人間国宝の技術を伝承する場ですが、職人になりたい研修生もいるにもかかわらず、職人との接点・交流が少ないために修了後に就職できず、輪島に定着しにくいという「第2の壁」があります。また、職人は高齢化しており、教え手としてもあと10年が限界であり、技術断絶の危機にあります。

・売上額の低下と低工賃の問題：構造的課題 A

職人に輪島塗の生産を発注し、顧客に販売する塗師屋としても、問題を抱えています。バブル期以降の売り上げの漸進的な低下、従来の顧客層は高齢化し、高級な家具も売れなくなりました。デパートに入れるためには専門の間屋を通さないといけませんが、その中間マージン率が高く、一方で、加飾に用いる金価格など材料費の高騰の板挟みにあり、職人の工賃を上げられない限界状態にあります。

また、従来の発注者―請負者としての塗師屋と職人の縦のつながりの強い関係も、職人が適正な工賃交渉をしにくい土壌となっています。一方で、職人のほうも職種によっては職能団体がない場合もあり、やはり工賃交渉をしにくい土壌をつくっています。

つまり、輪島塗産業は現在、売上げ額の低下から職工賃を上げられない、低賃金なので職人が実子に跡継がせないし弟子もとれない、外部からの参入も厳しくて後継者不足、その結果の生産困難、そして売上げ額が向上しない、という悪循環に落ち込んでいます。

・輪島塗とそれ以外の漆器類の違い、公式な呼称の不在

輪島塗（本堅地塗）には伝統産業品（経産省）と伝統工芸品（文化庁）としての製法上の規定があります。しかし、一旦製品になってしまうと、漆塗りの下地がみえないために、輪島塗の真正性がわかりにくいという難点があります。また、一般ユーザーには輪島塗（本堅地塗）とそれ以外の漆器との差異がわかりにくいいため、輪島塗（本堅地塗）

だと勘違いして安価な漆器を購入しているケースも多々あります。そうなると、本物の輪島塗（本堅地塗）に対しての適正な価格設定が難しくもなります。そもそも輪島塗以外の漆器類をどう呼称するか、その呼称すら公式的に統一できていません。

・現代的需要の把握が難しい

売上げ額を向上するためには、現代のニーズに応えるデザインの漆器を企画開発して、販路を拡大していくことも求められます。しかし、職人は指示された製品を手早く製作する能力は高い一方で、顧客との直接の接点がないため、どのような製品を作れば売れるのか、よくわからないと言います。

●2024年1月1日 令和6年能登半島地震及び2024年9月21日 豪雨災害

<震災によって発現した課題C：生産体制の崩壊>

・生活および生産拠点の被災と再建困難

自宅や工房が全半壊した職人は、現在、仮設住宅に住まいし、仮設工房にて作業されている方も多数いらっしゃいます。しかし、仮設住宅と仮設工房はいずれも入居期限があり、その後の作業場確保が難しい状況です。仮設住宅や復興公営住宅は「住む」ための場であり、作業するスペースの余裕がありません。そのため、とくに塗り工程の場合、自宅と工房の近接性が求められるので、職人としては工房付住宅を再建したいにもかかわらず

ならず、その資金が不足しているというジレンマを抱えています。

・職人や作家の輪島からの離散

今次災害によって金沢方面へ広域避難した職人もいます。とくに、現在、子育て中の世代では、現時点において、子育て環境としての学校や遊び場などの環境が整っていないし、近い将来においても子の成長に沿ってすぐに整備される見込みがみえないため、輪島に戻らずに金沢方面で定住することにした、という声があります。加飾などの職能では輪島を離れても生産作業上の不都合はないそうです。

・漆芸関連原料・道具などの調達困難

原料となる木を扱っていた木商人、地の粉の制作者、製作道具の販売者はこれまで高齢の方々がなんとかつないでいたところでした。この度の災害を機に、いよいよ引退されてしまいました。そのため、関連原料、道具などの調達が困難になっています。

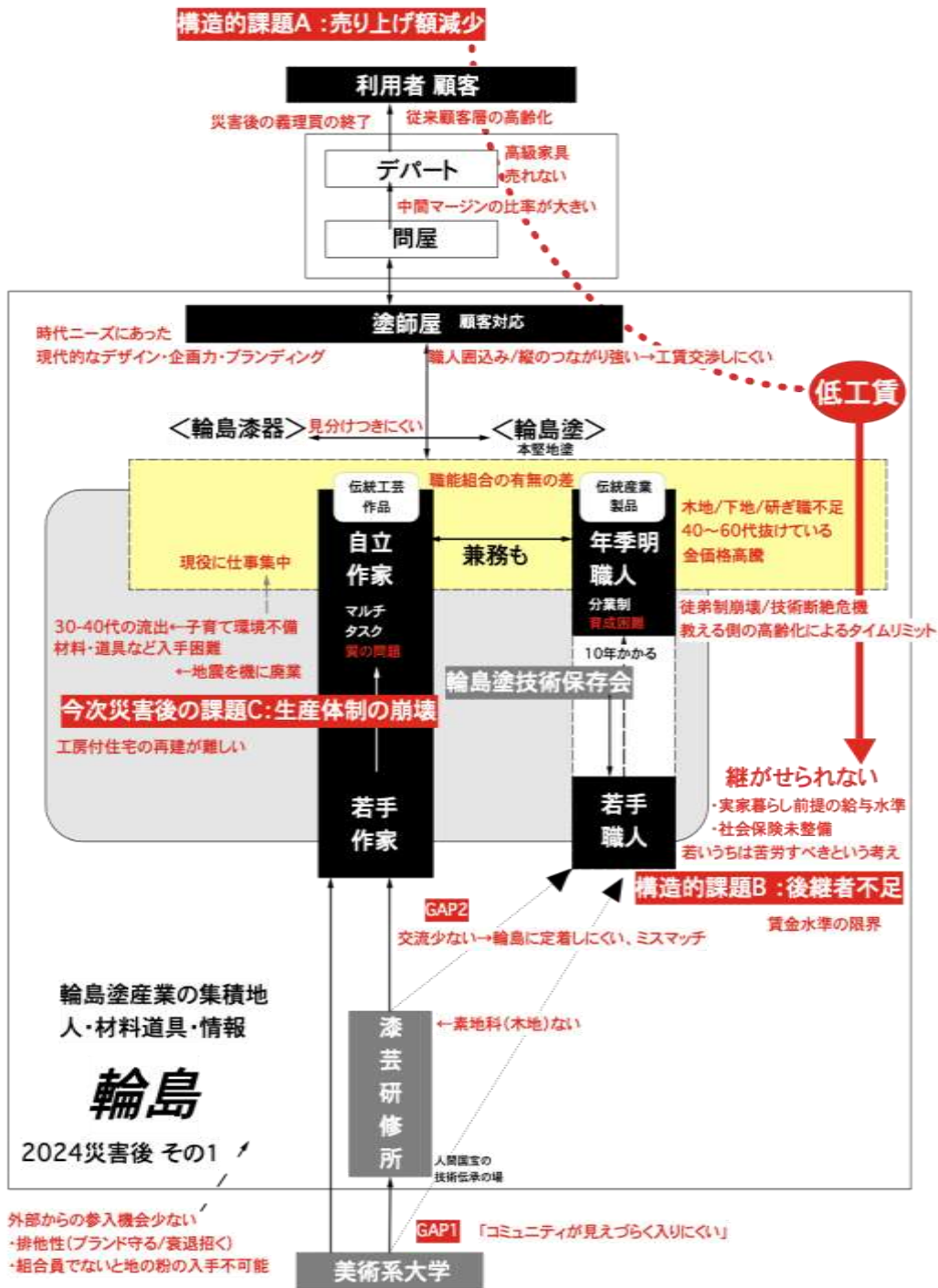


図 2-1.4. 輪島塗の産業構造と課題（2024 年能登半島地震後）

2-1-4.小結：輪島塗の供給体制再構築および売上額向上に向けたアクション

以上の今次災害による課題と災害前からの構造的課題に対して、輪島塗の復興とその持続性を担保するためには、1)輪島塗の販売売上額の向上、2)職人工賃の適正化、そして3)供給体制の再構築の三つが大きな目標となります。

1) 売上額の向上←構造的課題 A

まずは売上げ額を向上させることが最も重要な産業的課題です。それには販路拡大が求められます。個人への販路拡大と海外への販路拡大の2パターンがあります。

まず、若者などの**個人顧客への販路拡大**に関しては、「商品の多角化」が有効でしょう。現代的な価値、例えば「かわいい・おしゃれ」な漆器類のデザインが求められます。この際、作家・職人による直販もあります。例えば、ある作家は、展示会で若年の顧客層を開拓し、SNS でつながって「ファンを育成していくという現代的な頼母子講を形成している方もみられました。必ずしも富裕層でなくとも「私の推し作家による一品オーダー」が現代的といえます。また作家や職人でチームを作って、デパートでの展示会に共同出展するという事例もありました。

→時代ニーズにあった現代的なデザイン力・企画力・ブランディング能力の滋養

次に**海外への販路拡大**は、これまでのところ、蒔絵万年筆が好評です。ただし、輪島塗は木製品であるため、海外の低湿度によってひび割れや狂いを生じやすいという弱点の克服が求められます。なお、海外への販路拡大については輪島漆器商工業協同組合による支援が行われる予定と聞いております。

また、これまで輪島塗は「行商」が基本でしたが、海外顧客は輪島塗が作られるプロセスに興味を持つ可能性が高いことから、海外顧客を輪島に招いて、輪島塗の生産プロセスを見せるおもてなしを行う「迎商」を展開したい、という意向も聞かれました。

2) 職人工賃の適正水準化←構造的課題 B

職人工賃の適正水準化が後継者不足の最も核心的な課題といっても過言ではないでしょう。工賃が低いがゆえに、子に継がせない、新たに職人になる若手が少ないからです。美大生ワークショップでも、現在、少子化により、多くの職業の選択肢がある中で、わざわざ輪島塗職人を選ばない、という若者の率直な意見が聞かれました。しかし、売上げ額を向上しない限り、状況の反転は難しいことは前述の通りです。

ただし、賃金水準として、いくら金額を上げようにも限界があり、結局、都市部や成長産業の賃金水準に勝てないという現実をふまえて、むしろ、ものづくり志向や作家になりたいという生き方、或いは働きたい環境など働き方を重視する若者を取り込んでいくクルートを展開すべき、という意見もありました。

3) 供給体制の再構築←構造的課題 B、今次災害による課題 C

後継者不足という課題と今次災害による生産体制の崩壊という課題に対して、**人材供給と人材育成、環境整備**の3つの取り組みが求められます。

第一に、**人材供給**とは、現在で言えば、全国の美術系大学生が、その後に、輪島漆芸研修所や（仮）職人養成所に入所しやすいように、両者をマッチングする場が重要となります。

第二に、**人材育成**とは、まさに輪島漆芸研修所や（仮）職人養成所といった学校がその主要な役割を担うものと考えます。その際、（仮）職人養成所に期待されるのは、上記の時代ニーズにあった現代的な商品の企画・デザイン・ブランディング能力と経営能力の滋養です。マーケティング能力や広報発信能力の滋養を求める声もありました。

また、学校を修了した後の**継続的な技術研鑽あるいは技術承継の機会**も大切です。上述の「第二の壁」を乗り越えるべく輪島漆芸研修所や（仮）職人養成所とその後のメンター的な職人をマッチングする場も重要でしょう。これに関しては、現在も輪島塗技術保存会のメンバーによる機会が提供されています。さらに、輪島塗は分業制であり、個々の職種の職人の育成には時間がかかります。職人が自立できるまでの経済的支援を求める声もありました。

第三に、**環境整備**とは、今次災害での被害対策です。今次災害によって自宅兼工房

を失って、その再建が難しい職人が共同で利用できるシェア型工房付き住宅の整備です。

これは「現代版の塗師屋造り」といえます。一方、今次災害で大きな被害を受けて、輪

島を離れる職人も多い中で、それでも輪島に戻りたいという職人からは、その理由とし

て、輪島の漆芸産業集積地としての優位性（人・材料道具・情報）が挙げられました。

輪島には長い歴史によるポテンシャルがあります。

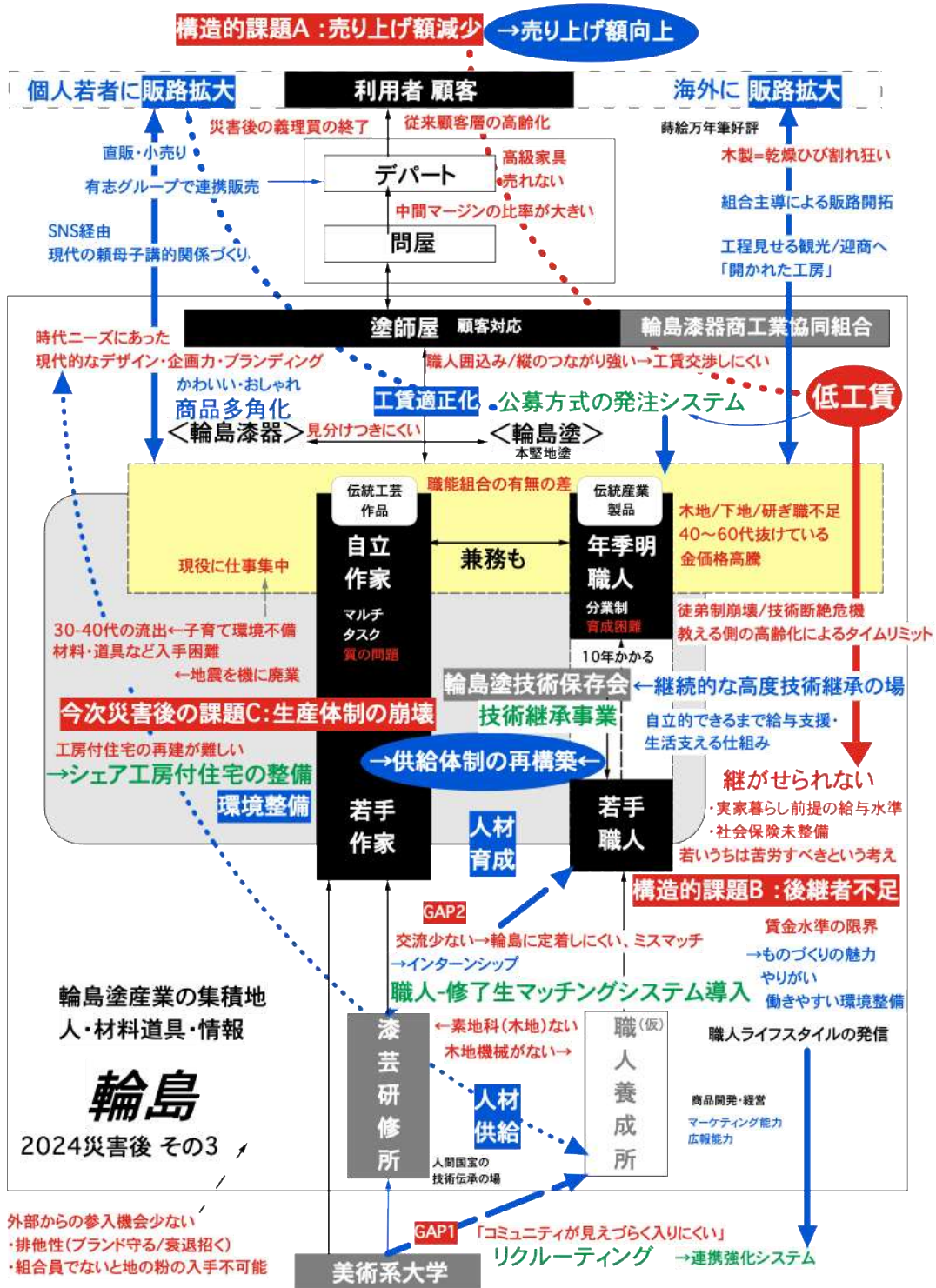


図 2-1.5. 輪島塗の産業構造と課題、解決策（2024 年能登半島地震後）

2-2.輪島塗の生産構造と「塗師屋造り」(担当：神奈川大)

本節では、輪島塗の生産体制を支えてきた空間的・建築的基盤として、「塗師屋造り」に着目する。輪島塗は、多数の専門職人による高度な分業制によって成立してきた工芸であり、その品質と一貫性は、個々の技術のみならず、それらを統合する仕組みによって支えられてきた。本章は、こうした分業制工芸としての輪島塗を、建築と空間の視点から読み解くことを目的とする。

とりわけ、塗師を中核とする塗師屋造りは、生産・生活・教育・管理を一体化した生産単位として機能してきた。そこでは、

工程ごとの特性に応じた空間配置や環境制御が行われると同時に、日常的な人の往来を通じて、技術や美意識が継承されてきた。本章では、河井町朝市地区に所在していた「塗師の家」(能登



半島地震で消失)を主事例とし、現存する塗師蔵の事例を補助的に参照しながら、塗師屋造りの空間構成と生産構造の関係を明らかにする。

以下ではまず、塗師屋を核とした輪島塗の生産体制を整理し、次に塗師屋造りの具体的な空間構成と工程との対応関係を検討する。さらに、近年の生産体制の変化や震災による喪失を踏まえ、塗師屋造りが現代の復興

塗師の家(右から1軒目)※

に対して持ち得る示唆を考察する。

2-2-1. 塗師屋を核とした生産体制と「一つ屋根の下」

塗師という総合プロデューサーの役割

輪島塗における塗師は、塗り工程、とくに上塗りを担う高度な技術者であると同時に、分業によって構成される漆器制作全体を統括する存在であった。塗師は顧客からの注文を受け、用途や器種、価格帯に応じて工程全体を構想し、それぞれの工程を担う職人に仕事を配分した。さらに、工程の進行状況を把握しながら調整を行い、最終段階では完成品としての品質判断を下す役割を担っていた。輪島塗の完成度や作風の一貫性は、個々の職人技の積み重ねによって支えられているが、それらを製品として成立させる統合的判断は塗師に委ねられていた。すなわち塗師は、技術者であると同時に、生産全体を設計・管理する総合プロデューサーとして機能していたのである。

生産単位としての塗師屋

塗師屋とは、この塗師を中核として成立する生産単位であり、単なる居宅や工房の名称ではない。塗師屋には、塗師本人の生活の場と、生産を担う塗師蔵や作業場、さらには分業職人の出入りを前提とした動線や空間構成が一体的に組み込まれていた。そこで



図 2-2.1 輪島塗の分業による製造工程

は、仕事と生活が明確に分断されるのではなく、日常の営みの中に生産活動が自然に組み込まれていた。こうした環境は、職人同士の顔が見える関係や、工程間の感覚の共有

を可能にし、輪島塗特有の品質と一貫性を支える基盤となっていた。塗師屋は、人・建築・制度が不可分に結びついた、生産の枠組みそのものであったといえる。

分業制工芸を統合する空間的枠組み

輪島塗は、木地づくりから下地、研ぎ、中塗り、上塗り、蒔絵、沈金、呂色に至るまで、多様な専門工程から成る高度な分業制工芸（図 2-2.1）である。このような生産形態において、工程同士が単に連結されているだけでは、製品としての完成度は担保されない。工程間の微妙な調整や、最終的な仕上がりに対する共通理解が不可欠である。

塗師屋は、分業工程を空間的に束ね、日常的な接触と調整を可能にすることで、輪島塗の生産を統合してきた。空間そのものが、分業制を成立させるための媒介として機能していた点に、塗師屋造りの本質がある。

2-2-2. 塗師屋造りの空間構成と工程の関係

塗師屋造りの代表的事例「塗師の家」

当該建物は、明治 43 年（1910 年）の輪島大火の直後に再建され、その後の輪島における町屋建築および塗師屋造りの一つの典型を示してきた重要な遺構であった。平成元年（1989 年）頃には、当時の家主・中室勝郎氏（善仁工房）と建築家・高木信治氏に

よって、単なる保存にとどまらない創造的な改修が行われ、塗師屋造りの本質を現代に継承する試みがなされた。しかし、近年の震災により建物自体は消失している。本節では、関係者へのヒアリング調査および関連資料に基づき、ハード（建築）とソフト（塗師文化）の両面から、塗師屋造りの空間構成と生産文化の価値を詳細に記録・整理する。

「人前職後」による塗師屋の構成原理

河井町朝市地区に所在していた塗師の家は、通りに面した手前側に居住・接客空間を、奥側に作業・蔵空間を配置する「人前職後」の構成（図 2-2.3）をとっていた。この形式は、輪島塗が店舗販売ではなく、全国各地への行商を主とする生業形態であったことに由来する。敷地は間口が狭く奥行きが深い短冊形であり加賀藩政下の都市条件とも整合している。外観は切妻造りの質素な町屋である一方、内部には漆塗りの柱や精緻な建具が配され外部に対して閉じながら内部に豊かな世界をつくり出す、都市型塗師屋特有の二重構造が成立していた。

通り庭に組み込まれた教育と美意識の装置

建物を貫通する通り庭(図2-2.4・図2-2.6)は、単なる動線ではなく、塗師屋造りにお



塗師の家正面を前面道路より見る※

ける重要な教育装置であった。塗師は職人に対し、作業場に近い勝手口からの出入りではなく、あえて表玄関から通り庭を通過して奥へ進むことを求めている。通り庭に面する炉の間や中の間には、額入り障子を介して座敷のしつらえが視界に入り、親方が諸国の行商先から持ち帰った掛け軸や生け花を日常的に目にする構成となっていた。これは、情報が限られた時代において、顧客である富裕層の美意識や暮らしを身体的に学ばせるための、意図的な建築的仕掛けであった。

塗師蔵という環境制御システム

塗師の家に付属する塗師蔵（図 2-2-5、図 2-2.3. 「人前職後」の機能配置 2-2-7）は、厚い土壁で覆われた堅牢な建築であり、漆の硬化に不可欠な温度・湿度を管理するための環境制御装置として計画されていた。二階は最終工程である上塗り専用の空間とされ、歩行による塵の舞い上がりを避けるため最上階に配置され、職人の入室後は階段を閉鎖して密室化された。一階は中塗りや準備工程の場であり、壁面には「いるわ」と呼ばれる保管棚が設けられ、在庫管理や工程調整の拠点として機能していた。

防災と在庫管理を内包した床下構造

塗師蔵の床下には、水を貯めた桶（土管）が埋設されていたと伝えられている。これは火災時に熱で蒸気を発生させ、蔵内部の湿度を高めることで、完成に近い漆器や

貴重な道具を延焼から守るための自動的防災機構であった。塗師屋造りにおいては、防火や在庫管理といったリスク対応も、建築そのものに組み込まれていたのである。

工程特性に基づく厳密なゾーニング

平面計画においては、粉塵や振動を伴う下地工程や研ぎ工程を、静寂と清浄さが求められる塗師蔵から物理的に離隔した裏庭側に配置していた。明治期の配置では、裏庭の大半が下地場として用いられ、分業制における各工程が互いに干渉することなく作業できる環境が確保されていた。このような厳密なゾーニングは、分業制工芸としての輪島塗を空間的に成立させるための合理的な建築計画であった。

視覚的演出と塗師屋の文化的表現

塗師の家には、限られた空間を豊かに見せるための高度な視覚操作が随所に施されていた。玄関では柱間隔を奥へ行くほど狭めることで遠近感を強調し、実際以上の奥行きを感じさせている。また、渡り廊下では細い板材を用いることで視覚的な長さを演出していた。建具に描かれた波兔文様と円窓の反射によって満月が浮かび上がる仕掛けや、猪の目、宝相華といった象徴的意匠は、漆の特性と塗師の教養を前提とした塗師屋ならではの表現であった。

建材選択と拭き漆による耐久性の確保

建築用材には、能登特産のアテが多用されていた。アテは耐久性と防腐蚀性に優れ、漆との相性が良いことから、柱や外壁材として適している。内部の木部には徹底した拭き漆が施され、木目の美しさを引き出すと同時に、建物全体の耐久性を高めていた。塗師の家は、素材選択の段階から、塗師屋としての機能と思想を体現する建築であった。

2-2-3. 生産体制の変化と塗師屋造りが示す復興への示唆

前項では、「塗師の家」を事例として、分業制工芸としての輪島塗を支えてきた空間構成と生産文化の実態を明らかにした。そこから、塗師屋造りが単なる作業空間の集合ではなく、生産・生活・教育・管理を一体化することで、輪島塗の品質と一貫性を支えてきた統合的な生産システムであったことが確認された。本節では、この空間原理が近代以降の生産体制の変化の中でどのように変容してきたのかを整理するとともに、震災によってその物理的基盤を失った現在において、塗師屋造りが復興計画に対して持ち得る示唆を考察する。

工程分散化による生産構造の変化

戦後以降、輪島塗の生産体制は、需要の拡大や生産効率化を背景に、工程の分散化と外注化が進んできた。かつては塗師屋のもとに集約されていた作業や人の流れは、町の

各所へと拡散し、「一つ屋根の下」による統合的な生産環境は次第に失われていった。



図 2-2.4 通り土間と居住空間※

この変化は、生産量の確保や柔軟な受注対応といった点では一定の成果をもたらした一方で、塗師屋造りが担ってきた空間的統合の機能を弱める結果ともなった。



図 2-2.5 塗師蔵（左：蔦屋漆器店 塗師蔵2階、右：塗師の家 塗師蔵※）

品質管理と技術継承への影響

工程が空間的に分断されることで、塗師が全体を俯瞰し、工程間の微妙な調整を行う機会は減少していった。また、日常的な接触の中で行われてきた暗黙知の伝達や感覚の共有も困難になり、品質管理や技術継承のあり方に少なからぬ影響を及ぼした。塗師屋造りが果たしてきた教育と統合の役割は、こうした生産構造の変化の中で、徐々に弱体化していったと考えられる。

震災による喪失と伝統的生産基盤を再認識する重要性

震災によって塗師の家が失われたことは、建築そのものの消失にとどまらず、輪島塗の生産を支えてきた伝統的な空間的・制度的基盤のうち、最も体系的に把握可能であった実体が失われたことを意味する。塗師屋造りは、長らく前提として存在してきたがゆえに、その役割や価値が十分に言語化・共有されてこなかった側面を持つ。しかし今回の喪失は、分業制工芸を成立させてきた空間構成や生産文化の重要性を改めて認識し、記録し、再評価する必要性を浮かび上がらせた。

塗師屋造りの空間原理の再解釈

塗師屋造りの本質は、伝統的な建築形式をそのまま保存・復元することにあるのではなく、生産・生活・教育・管理を一体として構築する思想にある。この空間原理を、現代の社会条件や技術環境に即して再解釈し、時代に応じた工房や住居のあり方、職人同士の関係性を支える場や仕組みとして再構築することは、輪島塗復興に向けた現実的か

つ有効な方向性といえる。

復興計画における建築的示唆

建築と生産体制を切り離さず、両者を同時に設計するという塗師屋造りの考え方は、今後の輪島塗復興計画全体に対しても重要な示唆を与える。本章で整理した塗師屋造りの空間原理を踏まえ、次章では、これらを現代の社会条件と技術環境のもとでどのように具体的な復興施策へと転換し得るかを検討する。



図 2-2.6 塗師の家 当初平面図

図 2-2.7 蔦屋漆器店 塗師蔵 2階平面図



図 2-2.8 塗師の家 1階平面図

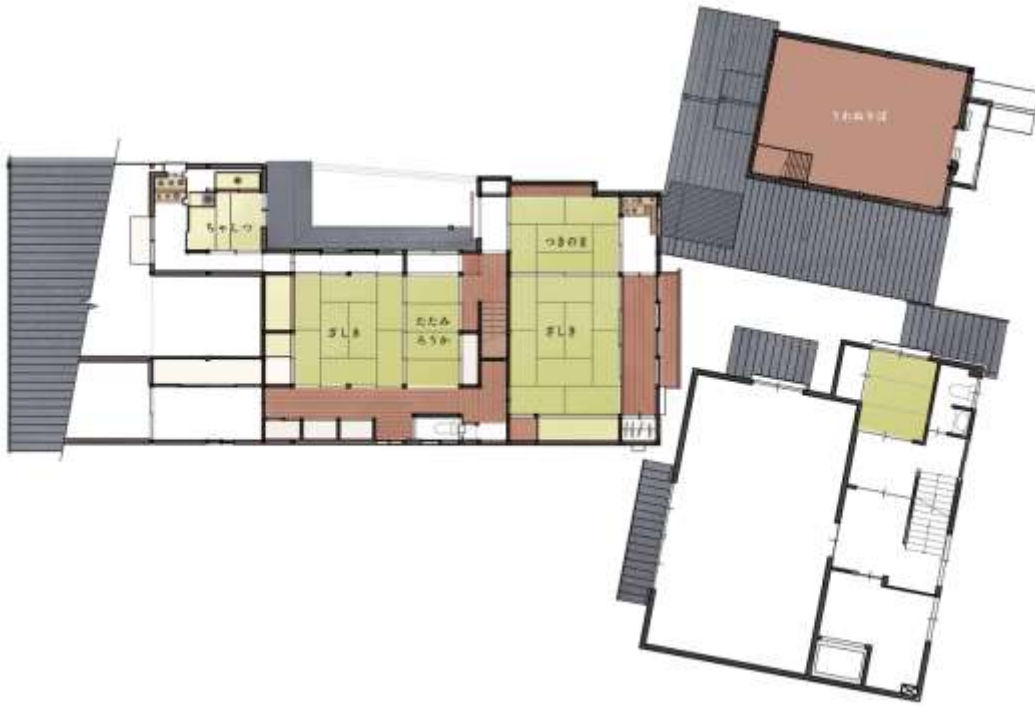


図 2-2.8 塗師の家 2階平面図



図 2-2.9 輪島市 中心市街地

塗師の家 きたまえ口※

※：写真撮影 畑 亮

参考文献

- 1) 中室勝郎「輪島塗師の研究－塗師文化と輪島のかたち－」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 11 号』石川県輪島漆芸美術館,2016.3,pp45-56
- 2) 中室勝郎「輪島塗と塗師文化」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 7 号』石川県輪島漆芸美術館,2012.3,pp59-65
- 3) 中室耕二郎氏ヒアリング記録（輪島塗復興協議会）2025.8.5

- 4) 高木信治「能登輪島・塗師の家改修記」『住宅建築』
- 5) 高木信治建築研究所 改修工事設計図書
- 6) 高木信治「漆と建築(1)」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 6 号』石川県輪島漆芸美術館,2011.3,pp48-56
- 7) 高木信治「漆と建築(2)」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 7 号』石川県輪島漆芸美術館,2012.3,pp49-58
- 8) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(2)「髹漆」宮腰強氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 5 号』石川県輪島漆芸美術館,2010.3,pp34-57
- 9) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(7)「髹漆」後藤孝一氏・徳野林松氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 10 号』石川県輪島漆芸美術館,2010.3,pp67-87
- 10) 大工素也氏ヒアリング記録（輪島塗復興協議会）2025.9.4
- 11) 寺尾藍子「資料紹介：『輪島時報』（輪島市管理）－近代輪島漆器産業の変遷を追う－」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 15 号』石川県輪島漆芸美術館,2015.3,pp42-50
- 12) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(3)「蒔絵」張間麻佐緒氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 6 号』石川県輪島漆芸美術館,2011.3,pp57-71
- 13) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(4)「沈金」古今菁峰氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 7 号』石川県輪島漆芸美術館,2012.3,pp66-77
- 14) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(5)「椀木地」北浜保氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 8 号』石川県輪島漆芸美術館,2013.3,pp47-61
- 15) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(8)「朴木地」桐本俊兵衛氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 12 号』石川県輪島漆芸美術館,2017.3,pp67-86
- 16) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(9)「指物」高柳修一氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 15 号』石川県輪島漆芸美術館,2020.3,pp13-41
- 17) 高柳浩子「輪島塗技術保存調査に係る工房調査報告(10)「呂色」加本康夫氏・木戸勲氏」『石川県輪島漆芸美術館紀要 第 16 号』石川県輪島漆芸美術館,2021.3,pp11-32

2-3.輪島塗における工程別の工房空間と作業環境特性（担当 岡山大）

本節では、石川県輪島市における伝統工芸輪島塗の持続的な生産基盤の再構築を目指し、その中核を担う各工程の工房空間における構成実態と作業環境特性を建築学的視点から明らかにすることを目的とする。輪島塗は高度な専門技術を持つ職人による分業体制によって成立しており、その工程は「木地」「きゅう漆」「加飾」に大別される。各工程では、使用する機械設備、原材料の保管量、漆の硬化に必要な温湿度条件などが大きく異なるため、それぞれの工房空間は独自の発展を遂げてきた。しかし、これらの空間構成原理は従来、職人の経験や慣習に基づく部分が多く、客観的な数値データとして体系化されてこなかった。

2024年の能登半島地震及び、その後の豪雨災害は輪島塗の生産拠点に甚大な被害をもたらした。現在、多くの職人が仮設工房や避難先での作業を余儀なくされており、恒常的な工房の再建が喫緊の課題となっている。工房の再建にあたっては、単なる建物の復旧に留まらず、各工程の特性に最適化された作業面積の確保、機能的な収納配置、及び高度な環境制御を可能にする空間設計が不可欠である。

以上の背景を踏まえ、本調査では以下の3点を具体的な目的として掲げる。

1. **工程別空間構成の定量化**：実測調査に基づき、工程ごとの総面積および用途別面積（作業・収納・生活・通路）を算出し、各工程が要求する標準的な空間規模を明らかにする。
2. **職住関係と工房形態の類型化**：住宅と工房の接続関係（独立型・隣接型・一体型）を整理し、生産活動と生活空間がどのように共生しているかの実態を把握する。
3. **復興支援に向けた基礎資料の提示**：得られた知見を被災後の工房再建や次世代の作業環境整備における設計指針、および伝統的生産基盤の維持・継承のための基礎資料として提供する。

本章での分析を通じて、主観的な「作業のしづらさ」や「空間の不足」を客観的な「空間の欠損」として可視化し、より実効性の高い復興計画の策定に寄与することを目指す。

伝統的生産基盤としての工房空間

輪島塗は石川県輪島市で発展した漆器産業であり、堅牢な下地技法と、製品完成までに約124工程を要する分業体制を特徴としている。この体制は、各工程を専門とする職人が個別の工房で作業することで成立してきた。しかし、2024年の能登半島地震により多くの工房が被災し、生産基盤は大きな影響を受けた。今後の復興において工程特性に応じた工房再建を検討するためには、従来の工房の規模や構成、作業環境特性を整理することが重要である。

件である。

分析手法

① 工程

輪島塗の制作工程を「木地」「きゅう漆」「加飾」の三工程に分類した。各工房については、ヒアリング調査および作業実態の確認を通じて主に担っている工程を特定し、実測調査により得られた作業空間を工程別に対応づけた。

② エリア

工房内の空間利用の実態を把握するため、内部空間を「作業エリア」「収納エリア」「生活エリア」「通路エリア」の四つに区分し、実測図面をもとに各エリアの面積を算出した。エリア区分にあたっては、室用途ではなく、実際の使用状況に基づいて判断を行い、用途別エリアの設定基準を整理した。

③ 類型

工房空間の構成的特徴を把握するため、工房形態および内部構成要素に関する分類を行った。工房形態は、工房と住居との関係性に着目し、「独立型」「隣接型」「一体型」の三類型に整理した。また、内部構成要素については、平面構成、作業姿勢、家具・設備、収納構成、環境管理の五つの観点から分類を行い、工房内部に表れる空間的特徴を整理した。

2-3-2. 定量データからみた面積構成の特性

工程別の工房規模と面積分布

工程別の分布に着目すると、木地工程の工房は全体に規模が大きく、最大と最小の面積差が約 680 m²に及ぶなど、工程内でのばらつきが顕著である。中央値も他工程より高く、木地工程が一定以上の作業空間を必要とする工程であることが示される。これは大型機械の設置や部材・半製品の保管など、作業が物理的広がりを伴うためである。一方、きゅう漆工程および加飾工程の工房は 10～30 m²程度に分布が集中し、規模は比較的コンパクトである。分布幅も限定的であるが、作業内容や成立過程の違いにより、工程内で一定のばらつきがみられる。

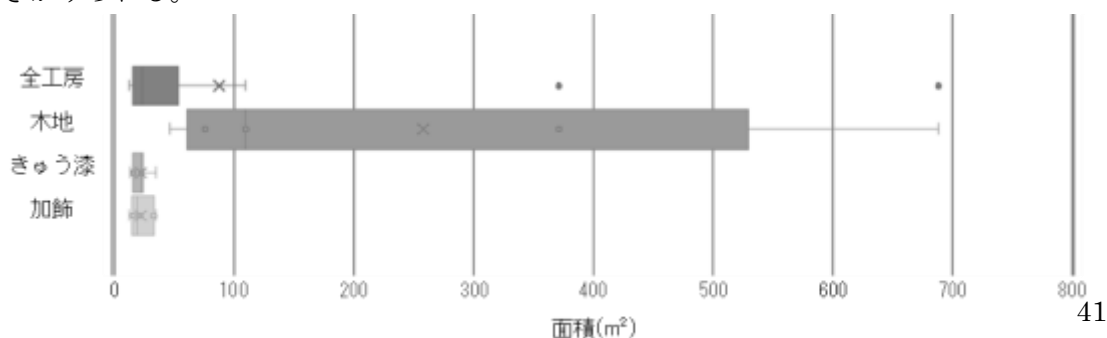


図 2-3.2 工房総面積の分布

工程別の工房規模と面積分布

輪島塗工房を木地、きゅう漆、加飾の三工程に分類し、用途別面積の規模特性を整理した。木地工程の工房は総面積が大きく、作業・収納・通路が大規模な工場的空間を形成している。

一方、きゅう漆工程及び加飾工程の工房は小規模であるが、きゅう漆工程では生活エリアが、加飾工程では通路エリアが相対的に確保される傾向がみられ、工程ごとに異なる空間構成が確認できる。

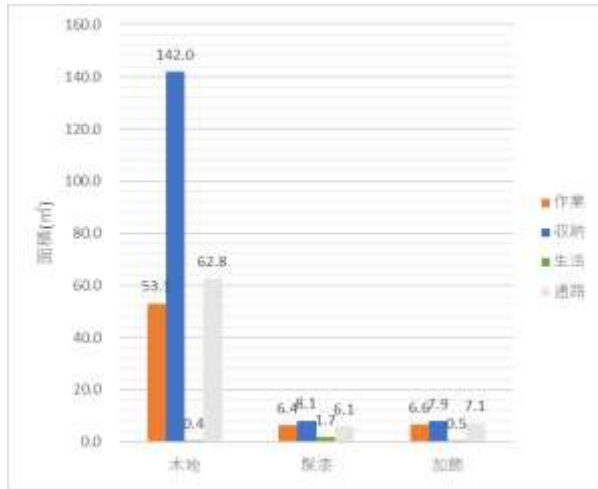


図 2-3.3 工程別用途別平均面積

2-3-3. 工房形態と内部空間の質的構成

作業内容に応じた工房形態の選択

輪島塗特有の作業工程の観点から、工程ごとの工房空間と住居の構成特性について整理する。工房形態は工房と住居の位置関係に基づき、「独立型」「隣接型」「一体型」の三類型に分類している。表 2 は調査対象工房について、各工程における工房形態の件数を整理したものである。以下では、この分類結果をもとに、木地工程、きゅう漆工程、加飾工程の順に工房形態の分布傾向とその背景について考察する。

木地工程の工房では、独立型・隣接型・一体型の全ての形態が確認されるが、いずれにおいても生活空間と作業空間の分離が重視されている点が共通している。特に独立型の工房は大規模な工場型となる事例が多く、大型機械の使用や騒音、粉じんの発生といった作業環境上の要因が、住居からの分離を要請している。一体型であっても作業と生活は明確に切り離されており、工房形態は規模や敷地条件と密接に関係している。

きゅう漆工程の工房では、三つの工房形態が比較的均等に分布しており、特定の形態に偏らない点が特徴である。従来は漆管理の必要性から生活と密接に結びついた工程であったが、温湿度管理の機械化により、その必然性は低下している。一方で、乾燥や

| | | 工房形態 | | |
|-------|------|------|-----|-----|
| | | 独立型 | 隣接型 | 一体型 |
| 模式図 | | | | |
| 全体件数 | | 6 | 3 | 49 |
| 工程別件数 | 木地 | 2 | 1 | 2 |
| | きゅう漆 | 2 | 2 | 3 |
| | 加飾 | 2 | 0 | 4 |

一時保管のための空間確保が求められ、住居と近接しつつ分離する隣接型や独立型が選択される事例もみられる。

加飾工程の工房では一体型が多く、作業台周辺で作

図 2-3.4 調査対象工房

業が完結するため、住宅内の一室など柔軟な設えが可能である。個人制作が中心である点も一体型が多い要因であり、生活と近接しながらも作業専用空間を確保する構成が一般的である。以上より、工房形態の選択は工程ごとの作業内容や環境条件と強く結びついていることが確認できる。

内部構成要素からみた工房空間の構成特性

工程毎に工房空間における構成要素にどのような差異が見られるかを分析すると、木地工程では、機械設備の配置や作業内容に応じた平面分節が重視され、工房全体を使い分ける構成が特徴的である。きゆう漆工程では、作業環境の管理が内部構成に強く反映され、特に湿度管理や照明計画に関する工夫が多くみられた。加飾工程では、比較的簡潔な平面構成の中で、繊細な作業を支える収納や環境管理が重要な要素となっている。

これらの違いは、2-3-3 で示した用途別面積構成やエリア比率の傾向とも対応しており、工程特性が工房空間の内部構成に具体的に反映されていることを示している。

表 2-3.2 各工程の内部構成要素(上：木地、中：きゆう漆、下：加飾)

| 工房 No. | 工程 | 平面構成 | 作業姿勢 | 家具・設備 | | | | | | 収納構成 | | | 環境管理 | | | | | | | | | | |
|--------|----|------|-------|---------|------|------|----|-----|----|------|-----|----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------|-----|------|-----|
| | | | | 作業台 / 机 | 作業機械 | 塗師風呂 | 夢棚 | ろくろ | 流し | 収納家具 | 床置き | 物置 | 工房外倉庫 | 空気 | | | 湿度 | | 光 | | 床保護 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | 空調 | 換気扇 | 集塵機 | 扇風機 | 加湿機 | 湿度計 | デスクライト | | 吊蛍光灯 | 採光窓 |
| 1 | 木地 | 分節Ⅰ型 | 立 | × | 大 | × | × | × | × | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × | × | × | × | × | × | × | |
| 2 | 木地 | 分節Ⅱ型 | 立・床座 | ○ | 中 | × | × | × | × | ◎ | ○ | ○ | ○ | × | × | × | × | × | × | ○ | × | | |
| 3 | 木地 | 分節Ⅰ型 | 立・椅子座 | ○ | 小 | × | × | × | × | ○ | ○ | ◎ | × | × | ○ | × | × | ○ | × | ○ | × | | |
| 4 | 木地 | 分節Ⅰ型 | 立 | × | 大 | × | × | × | × | ○ | ○ | ◎ | ○ | × | × | ○ | × | × | × | ○ | × | | |
| 5 | 木地 | 分節Ⅱ型 | 立・床座 | ○ | 中 | × | × | × | × | ◎ | ○ | × | × | × | ○ | × | × | × | × | ○ | ○ | | |
| 所有率(%) | | | | 60 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 100 | 100 | 80 | 60 | 20 | 60 | 60 | 40 | 0 | 0 | 20 | 20 | 80 | 0 |
| 工房 No. | 工程 | 平面構成 | 作業姿勢 | 家具・設備 | | | | | | 収納構成 | | | 環境管理 | | | | | | | | | | |
| | | | | 作業台 / 机 | 作業機械 | 塗師風呂 | 夢棚 | ろくろ | 流し | 収納家具 | 床置き | 物置 | 工房外倉庫 | 空気 | | | 湿度 | | 光 | | 床保護 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | 空調 | 換気扇 | 集塵機 | 扇風機 | 加湿機 | 湿度計 | デスクライト | | 吊蛍光灯 | 採光窓 |
| 6 | 髹漆 | 一室型 | 床座 | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | ○ | × | × | ○ | ○ | × | ○ | × | ○ | × | ○ | ○ | |
| 7 | 髹漆 | 分節Ⅰ型 | 椅子座 | ○ | × | ○ | ○ | × | × | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | × | × | × | ○ | × | ○ | × | × | |
| 8 | 髹漆 | 一室型 | 床座 | ○ | × | ○ | ○ | × | × | ◎ | ○ | × | × | ○ | × | × | ○ | × | ○ | × | ○ | ○ | |
| 9 | 髹漆 | 一室型 | 椅子座 | ○ | × | ○ | ○ | ○ | × | ◎ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | × | ○ | × | ○ | ○ | ○ | |
| 10 | 髹漆 | 一室型 | 床座 | ○ | × | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ◎ | × | × | ○ | ○ | × | × | ○ | ○ | × | ○ | ○ | |
| 11 | 髹漆 | 分節Ⅱ型 | 床座 | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | × | × | ○ | ○ | × | × | × | × | ○ | × | × | |
| 12 | 髹漆 | 分節Ⅰ型 | 椅子座 | ○ | × | ○ | × | × | ○ | × | ◎ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | × | × | ○ | × | × | |
| 所有率(%) | | | | 100 | 0 | 100 | 86 | 43 | 57 | 86 | 100 | 29 | 29 | 100 | 71 | 0 | 29 | 29 | 57 | 57 | 43 | 57 | 71 |

| 工房 No. | 工程 | 平面構成 | 作業姿勢 | 家具・設備 | | | | | 収納構成 | | | | 環境管理 | | | | | | | | | | |
|-----------|----|------|-------|-----------|----------|----------|--------|---------|--------|------------------|-------------|--------|-----------------------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------------------------|------------------|-------------|-------------|
| | | | | 作業台/ 机 | 作業 機械 | 塗師 風呂 | 夢 棚 | ろく ろ | 流 し | 収 納 家 具 | 床 置 き | 物 置 | 工 房 外 倉 庫 | 空気 | | | | 湿度 | | 光 | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | 空 調 | 換 気 扇 | 集 塵 機 | 扇 風 機 | 加 湿 機 | 湿 度 計 | デ ス ク ラ イ ト | 吊 蛍 光 灯 | 採 光 窓 | 床 保 護 |
| 13 | 加飾 | 一室型 | 床座 | ○ | × | ○ | × | × | × | ◎ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | × | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 加飾 | 一室型 | 床座 | ○ | × | ○ | × | × | × | ◎ | × | × | × | ○ | × | × | × | ○ | × | ○ | × | ○ | ○ |
| 15 | 加飾 | 分節Ⅱ型 | 椅子・床座 | ○ | × | × | × | × | ○ | ◎ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | × | × | ○ | × | ○ | × |
| 16 | 加飾 | 一室型 | 床座 | ○ | × | ○ | × | × | × | ○ | ◎ | × | × | ○ | ○ | × | × | ○ | × | × | × | × | ○ |
| 17 | 加飾 | 一室型 | 床座 | × | × | ○ | × | × | × | ◎ | ○ | × | × | ○ | × | × | × | × | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 18 | 加飾 | 分節Ⅱ型 | 椅子座 | ○ | 小 | ○ | × | × | ○ | ◎ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | × | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ |
| 所有率(%) | | | | 83 | 17 | 83 | 0 | 0 | 33 | 100 | 83 | 17 | 33 | 100 | 33 | 0 | 0 | 67 | 33 | 33 | 50 | 83 | 83 |

・太字：所有率 100% ・作業機械の「大/中/小」は機械の規模を表す ・「◎」は工房での主要な収納方法であることを示す

2-3-5. 復興計画における示唆

本調査では、石川県輪島市における輪島塗工房の実測・ヒアリングを通じて、工程特性が空間構成に与える影響を定量的に明らかにした。主な知見は以下の通りである。

工程による空間規模と構成の明確な差異

木地工程：大規模な木工機械の設置と、原木・荒型などの大量の材料保管が必要であり、全工程中で最大の面積（平均 258.3 m²）を要する。また、騒音・粉塵対策から住居と分離した「独立型」の構成が必須となっている。

きゅう漆工程：漆の硬化管理（温湿度制御）が空間構成の核となる。面積配分は 20 m²前後と極めて安定しており、住居と密接に関係する「一体型」や「隣接型」を選択することで、24 時間体制の環境管理を可能にしている。

加飾工程：小規模ながら、繊細な道具類を管理するための高密度な収納空間が特徴である。作業内容に応じた個別性が高く、住宅の一部を柔軟に活用する傾向が強い。

収納エリアの重要性

全工程において、実際の作業スペース以上に、材料・道具・仕掛品を保管する「収納エリア」および「通路（動線）」が占める割合が大きい（特に木地・きゅう漆では総面積の 4 割以上）。これは、輪島塗の生産基盤が単なる「作業の場」ではなく、長期にわたる乾燥や熟成を支える「保管・環境管理の場」であることを示している。

職住一体による生産環境の維持

漆の特性に合わせた環境制御を、住宅の断熱性能や生活動線とうまく組み合わせることで維持してきた実態が確認された。この「職住近接」の構造は、輪島塗の品質を支える建築的知恵と言える。

今後の展望と課題

本調査で得られた定量的なデータは、震災からの復興過程において、個別の工房再建や共同工房の設計における重要な指針となる。今後の課題と展望は以下の通りである。

復興再建への具体的活用：本調査で明らかになった「工程別の標準的な必要面積」や「収納エリアの比率」をベースに、被災した職人が自身の再建計画を立てる際のガイドラインを策定する必要がある。特に失われた「収納機能」の回復が生産再開のボトルネック解消に直結する。

時間的变化と増改築プロセスの解明：本研究は現時点の空間構成を捉えたものであるが、工房は職人の成長や家族構成の変化に応じて増改築を繰り返してきた歴史を持つ。将来的な継承を見据え、変化に柔軟に対応できる工房設計のあり方を検討する必要がある。

作業動線と生産効率の深度化：今後は作業姿勢や道具の配置といったミクロな視点での動線分析を行い、より身体的負担が少なく、高品質な生産を可能にする次世代型の工房環境を提案していくことが求められる。

産地全体のレジリエンス強化：個別工房の再建に加え、木地工程のような大規模空間を要する工程については、共同での保管場所確保や環境管理の共同化など、産地全体での持続可能な生産基盤のあり方を模索していくべきである。

木地

木から形を生み出す



下地

布着せ・地の粉と漆で丈夫さをつくる



塗り

漆を塗り重ね、表面を整える



研ぎ

形を整える



加飾(蒔絵)

漆と金属粉で模様を描く



図 2-3.5 各工程の代表的な作業を工房模型

参考文献

- 1)吉井礼「伝統的ものづくり地域の継承にむけた課題と可能性に関する [文化庁, 日付不明]研究～ 京都市西陣織を例に～」平成 15 年度東京大学大学院工学系研究科修士論文梗概,2003
- 2)井本葵,佐々木啓,塚本由晴「京手描友禅の不変の行程における仕事場」日本建築学会計画系論文集, 第 89 卷,第 818 号,pp755-763,2024
- 3) 安森亮雄,福沢潤哉,塚本琢也「注染の染工場における布からみた設いと表出—地域産業のものづくり空間における もの・建築・都市の関係の研究—」日本建築学会計画系論文集,第 86 卷,第 783 号,pp 1135-1145,2021
- 4) 井本葵,塚本由晴：京手描友禅工房の建物と立地の関係, 日本建築学会計画系論文集,第 90 卷,第 829 号,pp582-591,2025
- 5) 文化庁：輪島塗,国指定文化財等データベース ,
<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails/303/120>, (参照 2025-12-27)
- 6) 輪島漆器商工業協同組合：品質をつくる,輪島塗会館,
<https://wajimanuri.or.jp/kumiai/file07/hinshitu6.html>, (参照 2025-12-27)

第三部 協議会：

輪島塗の復興のため何を行っていくか

-輪島塗復興のアクションプラン-

3-1. 輪島塗復興にむけての協議会の活動理念

輪島塗と漆芸の技術・文化・産業の集積地である強みを活かして、次代に輪島塗を持続可能にしていくための構造改革にむけて、関係主体の動きと相互補完するアクションを行います。そのために、輪島塗復興協議会が「生産・育成・デザイン・販売」を一体で支える中間支援組織として機能したいと考えています。さらに、行政・企業・職人・大学などとの連携を通じて、輪島塗の文化と産業を再構築する「共創型復興モデル」を確立して参ります。

3-2. 重点アクションプラン：職人支援の強化—技術継承と報酬体系に関する基本方針

輪島塗の復興においては、新たな人材の育成だけでなく、既存の職人・作家が担ってきた高度な技術と知見を、体系的に次世代へ引き継ぐことが不可欠です。

聞き取り調査の結果、収入の不安定さから制作に追われ、若手指導に十分な時間を割くことが難しいという、「教えたくても教えられない構図」が存在していることも明らかとなりました。さらに、いわゆる「数仕事（まとまった制作量）」が減少し、反復作業を

通じて技術を磨く機会も失われつつあります。

本事業では、**制作や商品開発、ワークショップ等において、熟練職人・作家が若手の制作指導・技術監修・デザイン開発の助言を担う役割を「技術継承」と位置づけます。**

これらの役割はボランティアに依存せず、指導内容や関与時間に応じて、講師謝金・監修料等の報酬を支払う制度を整備します。

併せて、IP（キャラクター・ブランド等）を活用した商品開発などにより、計画的に「数仕事」を創出し、若手が繰り返し手を動かしながら学び、熟練職人は監修・指導を担いながら収入を得られる循環をつくります。これにより、既存の職人が主体的に参画しながら、**若手育成と市場開拓を同時に推進できる持続的な体制を構築**します。

なお、本事業における技術継承や指導謝金等については、当初より構想してきた「**輪島塗復興協議会基金**」を主要な財源の一つとして位置づけます。同基金は、短期的な運営費ではなく、輪島塗の技術継承・人材育成を目的とした目的積立金として運用し、その趣旨に沿って、講師謝金・技術監修料・実習指導等に計画的に充当します。これにより、単年度の予算状況に左右されることなく、既存の職人・作家が安心して技術継承に関わり続けられる持続的な仕組みを整えることができます。また、基金の原資については、外部助成金や寄付だけに頼らず、本事業から新たに創出される収益を積極的に活用します。具体的には、IP を活用した新商品の販売益や、企業との共同事業・協賛等で得られた収益の一部を「輪島塗復興協議会基金」へ計画的に積み立てる仕組みを整備し

ます。

こうした循環により、事業で得た成果を未来の人材育成と技術継承へと還元し続ける、持続可能な自助的モデルを構築していきます。

- ① 収益をつくる（IP、企業連携、販売会 など）
- ② 収益の一部を基金へ積立（定めたルールに基づく）
- ③ 基金で技術継承を支える（講師謝金・指導料・監修料 など）

「稼ぐ → 蓄える → 継承へ回す」循環モデルの構築を目指す

3-3.輪島塗復興の課題とアクションプラン（AP）

課題：弟子入りや技術継承の場が失われ、職人間や志望者との接点が希薄化している

→AP①: 人と人をつなぐ仕組み（リクルート・育成・継承のマッチング）の構築

「(仮) 輪島塗職人マッチングシステム」を構築して弟子になりたい人と弟子を取りたい職人をマッチングします。また、美術系大学や高校と連携して希望者を定期的に紹介・交流するほか、技術見学や短期実習ができる「オープン工房制度」を導入します。ここでは「見学のみ」「実習希望」「師弟契約希望」など関わり方に幅を設けて、より関わりやすくします。

課題：若手職人が作品を制作する機会が少なく、技能を磨く場が不足している

→AP②: **新たな職人育成の機会としくみを創設**

協議会が販売・受注窓口となり、塗師屋・作家・個人工房に対して「公募方式」で制作発注できる仕組みを整備します。受注にあたっては、技術水準やテーマを明確にし、若手の参加枠を設定します。参加者に対しては、制作指導・品質管理・販売に向けた基礎支援を行い、実践の中で技能向上を図ります。

併せて、既存の社会保障制度の活用についても検討し、ハローワークや障害者就労支援事業等と連携して、就労機会の創出・定着支援を進めます。さらに、大学等との連携により、インターンシップや実習、リクルート支援を行い、若手人材の育成と就職・定着につなげます。

課題：伝統品以外の新しい需要創出が必要。若手が参加できる制作販売ルートが少ない

→AP③: **IP（アニメ・キャラクター・ブランド）を活用した新漆芸品を企画販売**

協議会が統括し、IP（知的財産・キャラクター・ブランド等）を活用した新しい漆芸商品の企画・デザイン開発を行います。市場ニーズを踏まえた商品ラインを構築し、塗師屋・職人・作家へ発注します。若手の育成を兼ねた「公募コンペ形式」により参画機会を広げるとともに、ふるさと納税返礼品、オンライン販売、クラウドファンディング等

を活用して、従来にない販路・顧客層を開拓します。

課題：輪島塗のデザイン開発力が限定的で新しい市場ニーズへの対応が不足している

→AP④: 全国の美術系大学と連携してデザイン力強化と全国的交流

全国の美術系大学と連携して定期的にデザイン勉強会や交流ワークショップを定期的に開催します。この際、学生や若手デザイナーと職人が共同で企画・試作を行い、製品化を目指します。さらに参加大学を「(仮) 輪島漆器デザインネットワーク」として継続化します。

課題：若手職人が作品を販売する販路が少なく、技能を磨く場が不足している

→AP⑤: 企業と連携して若手の販売会を開催し売れ筋などの実証事業開催

企業と連携し、若手職人による販売会や展示販売の機会を創出します。販売の場で得られたデータ（来場者の反応、売れ筋、価格帯、購入理由等）を分析し、今後の作品づくりや販売戦略に活かす「実証事業」として位置づけます。

あわせて、本事業は、塗師屋にとっては若手を起用した新たな商品開発や仕事づくりに結びつける機会となり、職人にとってはこれまでになかった販売の場を提供します。さらに、作家にとっては、実際の市場の反応を踏まえながら、自らの作品を客観的に評価し、改良していく学びの場として機能させます。

これらの取組は、個別施策として独立して進めるのではなく、「リクルート→育成→制作→販売→次の改良」という一連の循環として位置づけます。

具体的には、AP①で人材との接点を広げ、希望者を育成の入り口へつなげ、AP②で制作機会を確保しながら技能を高めます。その上で、AP③と AP⑤によって新しい需要と販売ルートを開拓し、実際の販売結果を通じて検証と改善を行います。さらに AP④で外部のデザイン力や知見を取り込み、商品力と表現力を高めます。こうした取組の結果や学びを協議会で共有し、次の企画・育成プログラムへ還元することで、若手が継続的に成長し続ける仕組みを構築します。

課題：若手が輪島に戻っても、作業場と住居が確保できず定着しづらい

→AP⑥: 若手職人のための職住近接型「シェア工房+住宅」を整備

若手職人が共同作業できるシェア工房を民間資金（企業協賛・寄附・CF など）で整備します。工具や塗室の共用、相談・研修スペースも併設し、輪島市外からの移住職人向けのアトリエ住居（短期滞在型）支援も検討します。

3-4.アクションプラン（AP）のスケジュール

本計画の計画期間は令和8年（2026）度から令和12年（2030）度の5カ年とします。

| 年 | 2026 | 2027 | 2028 | 2029 | 2030 |
|--|-------|------|------|------|------|
| AP①: 人と人をつなぐ仕組み（リクルート・育成・継承のマッチング）の構築 | → | | | | |
| AP②: 新たな職人育成の構築を構想 | → | | | | |
| AP③: IP（アニメ・キャラクター・ブランド）を活用した新漆芸品を企画販売 | → | | | | |
| AP④: 全国の美術系大学と連携してデザイン力強化と全国的交流 | 美大コラボ | → | | | |
| AP⑤: 企業と連携して若手の販売会を開催し売れ筋等の実証事業開催 | 企業の協力 | → | | | |
| AP⑥: 若手職人のための職住近接型「シェア工房+住宅」を整備 | 計画・設計 | | 施工 | 供用開始 | |

第四部

資料編

4-1. 輪島塗復興協議会×金沢美術工芸大学ワークショップ報告(251120)

4-1-1. はじめに

2025年11月20日、金沢美術工芸大学において、輪島塗復興協議会と学生によるワークショップが開催された。能登半島地震後の輪島塗の現状、職人の復帰状況、技術継承の課題、若い世代の関わり方などについて、学生と職人・塗師屋・協議会関係者が直接対話し、今後の復興と継承の方向性を共に考えた。当日は学生12名が参加し、大工（塗師屋）、浦出（塗師屋）、水尻（作家兼職人）、中島（塗師屋兼職人）、辻（碗木地職人）、協議会事務局（小林）、金沢大学の西野教授および同研究室学生5名の計19名で意見交換が行われた。参加学生は漆芸専攻だけでなく、油画、日本画、製品デザインなど幅広く、輪島塗への関心の幅が確認された。あわせて当日参加できなかった学生7名による事前アンケート回答も得られ、合計22名の意見を収集することができた。学生の学年構成は、アンケート回答では2年生1名、3年生6名、4年生3名。対面ヒアリングでは2年生5名、3年生3名、4年生2名、修士1年2名であり、学部・修士を横断した意見が集まった。

4-1-2. ワークショップの概要

a アンケート調査：回答期間 2025年11月10日～19日

回答者：金沢美術工芸大学漆芸科等学生10名：2年生1人、3年生6人、4年生3人

b.対面ヒアリング調査：2025年11月20日14:00-16:00@金沢美術工芸大学

回答者：金沢美術工芸大学漆芸科等学生12名（2年生5名、3年生3名、4年生2名、修士1年2名）ただし、アンケート回答者との重複が3名あり。

4-1-3. 回答結果

以下に設問と回答結果を記す。

【設問1】 将来目指している仕事や分野は？

●アンケート回答（7件）：

- ・アーティスト
- ・漆関係
- ・美術関係
- ・商品開発など2件（補足：ものづくりには携わりたく、その発信をしたい。開発をしたい。商品の素材を考えたり、生地を決めたり。）
- ・地域創生（補足：ものづくりを発信する側にいきたい。まちづくり、地方創生に興味あり）

る。大手に行って社会経験して、いずれ個人で発信していきたい。今のところ JR 系への就職を考えている。ソフト戦略に興味がある。)

・未定 2 件

●対面ヒアリング回答：

・デザイン事務所

・漆関係にいきたい。作家になりたい。輪島とかに入りながら作家のことやるか、完全に作家のことだけやるかで迷っている。輪島塗をしているという肩書きがあると仕事を取りやすいのでそこはメリットを感じる。作家だけでは食べていけない。食べていけるかを結構大事にしてる。漆のことをやっていきたいが、食べていくために他のことをやるのでも良い。独身でも良い。大学院に行って、あわよくば大学の先生になる道も考えている。

・美大に入る前は作家を目指していたが、入った後はこれを続けていくのか？と考えたり、作るのがしんどかった時期があったりした。単純作業だけだったり、作りたいものが作れなかったり。

・今は漆への関わり方が増えた。いろんな支え方がある。作るだけじゃなくて発信するとか。職人作業は求められる最低レベルが高すぎるので、そこに壁を感じる。授業の制作でそれを実感した。ミリ単位の誤差も許されない。そこを妥協したら次の工程にどんどん皺寄せがくる。一つ一つの工程がいかに大事かを実感した。

・漆の作品を作ったけど、見た目だけじゃなくて持ってみた感じや使い心地も大切だと実感。これは果てしないなと思った。

・中国の大学の漆の学部は同期が 15 人くらい居たが、今、漆をやっているのは自分だけ。アクセサリーは売れるが、オブジェなどの造形は有名な作家でないと売れない。人気になれないと自由がない職だと思う。造形をやめてアクセサリーやカップをやる人が多い。自分が売りたいものと世の中の需要とのギャップがある。お金を稼ぐシステムがない。漆の文化を広めるのが難しい、中国の漆も同じ課題を抱えている。

・卒業後は台湾で漆の教室をやりたい。

【設問 2】 その職業観から見て、「漆」や「伝統工芸」が関わる可能性はあるか？

●アンケート回答 (10 件)： ある 5 名、ない 2 名、分からない 3 名

【設問 3】 理想の働き方やライフスタイルは？

●アンケート回答 (7 件)：

・本業は漆の現代美術の作家で、自営業で漆の箸やアクセサリーで生計を立てられたら

・毎月の収入の心配をしなくてよい

・漆工房を作りたいです

・ある程度の収入を確保しつつ作家活動

・健康第一

- ・自分の趣味と上手くバランスを取って働きたい。
- ・ものづくりに関わる仕事
- 対面ヒアリング回答：
 - ・フリー(個人事業主)
 - ・漆中心の生活になると思う。でもそれは仕方がないし、嫌ではない。
 - ・この職人とかの業界は安定が少ない。井波にインターンに行った時は、若い人がよく倒れてるっていう噂を聞いた。
 - ・職人か作家なら、今は作家という選択肢しかない。現実には、収入、時間、漆中心の生活が課題である。社会に出たとき、生活できないのはきついで、美大で身に着けた基礎技術を活かしてデザイン事務所などに入る方が現実的。
 - ・会社を立ち上げたりするのは自分の性格に合っていない。作家で成功する人は、一部。安定したいので会社勤めが良い。
 - ・私は仕事しながらでも自分の作品を作りたい。
 - ・(仕事場と生活の場については?) 絶対通いが良い。家はプライベートって決めている。
 - ・(仕事場と生活の場については?) 私は自分の家で仕事したい。私は以前、課題が締め切りに間に合わないって時に自宅で課題をやっていたが、漆とかこぼして汚しちゃったりして、賃貸だから落こんだことがあった。だから家にアトリエみたいな場所が欲しいと思っていて、理想を言えばギャラリーとかもあって他の友達とか作家さんと呼んで展示会みたいなこともできれば嬉しい。

【設問 4】 伝統工芸職人の魅力とは？

- アンケート回答 (7 件)：
 - ・技術力が身につく、高められるところ 3 件 それにより世界に出た時に差別化できる
 - ・伝統的な技術や文化を伝えていけること
 - ・やや仕事仕事を取りやすくなる点
 - ・工程

【設問 5】 伝統工芸職人になる際に、不安やハードルに感じる点は？

- アンケート回答 (9 件)：
 - ・収入 4 件
 - ・習得までに時間がかかる
 - ・狭いコミュニティの中での人間関係
 - ・生活リズム
 - ・同じ作業を繰り返すこと
 - ・体力
 - ・人との関わりが少なそうなところ (補足：自分の性格的に話をしていないとおかしくな

ってしまいそう)

【設問 6】「伝統工芸の職人」という働き方のイメージとは？

●アンケート回答 (10 件、複数回答化)：

- ・時間に縛られる 5 件
- ・技術重視 8 件
- ・チームより個人 3 件
- ・安定が少ない 6 件
- ・やりがいがある 3 件

【設問 7】伝統工芸やものづくりの仕事を「やってみたい」と思える年収はいくら位か？

●アンケート回答 (10 件)：

- ・300 万円台 2 件
- ・400 万円台 4 件
- ・500 万円以上 4 件

【設問 8】収入以外に、「やってみたい」と思える条件は？

●アンケート回答 (3 件)：

- ・労働時間
- ・適度に人と関わること
- ・まち全体が若者や移住者を受け入れる体制が整っている。地域活性イベントや補助金等

【設問 9】「輪島塗」という名前を聞いたことはあるか？

●アンケート回答 (10 件)：

- ・よく知っている 8 件
- ・聞いたことはある 2 件

●対面ヒアリング回答：

・学科に研修所を出た人がいた。技法は文章で知識としては知っていた。現地ならではの材料があるので実技は難しい。

【設問 10】輪島塗のイメージや印象は？

●アンケート回答 (6 件)：

- ・美しい、繊細、堅牢 2 件
- ・うつわ 2 件
- ・工程が多く、時間をかけて作っている
- ・軽くて丈夫

●対面ヒアリング回答：

- ・ちゃんとしたルールを守らないと輪島塗じゃないみたいな厳格なイメージ
- ・漆器だが、アートというイメージもある
- ・輪島塗を実際触ってみて重みがあった。普段使いには向かないのでは。飾っておくようだとか、料亭に置いておくだとか。
- ・松田権六の作品を見て、これは無理だと思った。この境地までは無理だ。
- ・私は香川から来ていて、香川漆器はアヴァンギャルドなイメージ、色使いも幅広い。一方で、輪島塗は赤や黒を基本としたクラシックなイメージを持っています。

【設問 11】 輪島塗のデザインや色合いの印象は？

●アンケート回答（6件）：

- ・漆の伝統的な黒や朱や金のイメージ 3件
- ・比較的、金を使っている
- ・美しさ、繊細さ 2件
- ・自然のモチーフのデザインが多く、日本の自然や季節感を反映している。豪華でありながらも温かみを感じさせる印象

●対面ヒアリング回答：

- ・お茶を習っているので、その道具としては使いたい。普段の生活に用いる道具として馴染ませるのは難しい。身の丈に合わない。欲しいかどうかという観点なら欲しい。
- ・赤や黒を基本としたクラシックなイメージ
- ・有名な作家の作品であれば欲しい。中国では赤木さんが流行っている。一貫制作に惹かれる。ネットに情報が多い人の作品は選ばれやすいと思う。
- ・アクセサリなら欲しい。
- ・私は蒔絵をやりたくて、輪島塗は技術がとても高度だと感じた。

【設問 12】 輪島塗の職人が減少している現状を知っているか？

●アンケート回答（9件）：

- ・よく知っている 3件
- ・少し知っている 6件

【設問 13】 輪島に滞在・移住してものづくりをすることに興味があるか？

●アンケート回答（10件）：

- ・ある 1件
- ・ない 3件
- ・どちらともいえない 6件

●対面ヒアリング回答：

・輪島はコミュニティ見えにくい、わかりにくい。色々な選択肢がある中で、わざわざそこを選ばない。

・(職人工房(職人として給料をもらいながら、空いた時間で作家)について興味あるか?)
商業としてと作家として、が両立できるのはいいと思う。

・研修所に通っている間の下宿は研修所が指定した仮設宿舎か工房か何かの3つしか選択肢がなく、他の職人さんのもとで修行を並行してしたらダメなように書いてあって、今は仕方ないかもしれないけど、そんな縛りがあるのかなと思いました。

【設問 14】 その理由、もし行くなら、どんな条件があれば良いか？

●アンケート回答 (3件) :

- ・収入と生活の保証が見込めれば
- ・過ごしやすい環境
- ・可能ならば関西や栄えた場所で就職したいと考えているから

●対面ヒアリング回答 :

- ・輪島は入りづらいイメージだが、輪島の事情が分かれば心配は少なくなる。
- ・住むところが限られてるっていう話がありましたけど、輪島の事情とか、限られてる理由がちゃんと分かれば心配は少なくて済みそうです。

【設問 15】 「輪島塗の復興」と聞いて、どんなことが必要だと思うか？

●アンケート回答 (8件) :

- ・幅広い人に気に入ってもらえるデザイン。輪島塗の技術を使った新しい見え方の作品
- ・人口増加。関係人口増加。
- ・まちづくり
- ・地域社会全体の協力が不可欠。地元の人々が誇りを持って輪島塗を支えることが、伝統文化の継承につながる。観光と連携させることで、地元経済の活性化にもつながる
- ・魅力を発信し、継手となる若い人にも興味を持ってもらうこと。担い手の確保、輪島塗をいいと思う人を増やす

●対面ヒアリング回答 :

- ・(作家と知り合うには? マッチングサービスがあれば使うか?) お茶教室でのコミュニティで出会う。インスタなど連絡を取る手段は整っているのでもうまく機能するかわからない。
- ・日本と中国の職人さんの交流機会が増えると良い。

【設問 16】 若い世代に受け入れられるためには、どのような工夫が必要か？

●アンケート回答 (8件) :

- ・現代の生活やニーズにあったデザインや物をつくる 5件

- ・販路拡大(SNS等) 2件
- ・面白いデザイン
- ・体験で付加価値をつける
- ・キャラクターとのコラボ
- ・後継者育成において支給金などがあるなど

●対面ヒアリング回答：

- ・大学でこういう専門的な漆の授業をするのでは遅いのでは。もっと高校とか中学とかから始めるのはどうか。

【設問17】もし自分がデザインや企画で関われるなら、どんなことをしてみたいか？

●アンケート回答(5件)：

- ・輪島塗の超絶技巧を現代美術に落とし込む
- ・現代的なデザインと融合させたインテリアアイテムや日常的に使える製品
- ・伝統的な価値や手仕事の素晴らしさを消費者にその価値を再認識してもらうこと
- ・漆器のイメージの向上
- ・特別感の演出をしつつ手の出せる価格帯に落とし込む
- ・他の分野とのコラボ
- ・毎日使いたいと思える器のデザイン

4-1-4. ワークショップおよびアンケートの総括

1) 学生の将来の志向と輪島塗との関わり可能性

「あなたが将来目指している仕事や分野」では、アーティスト、美術関係、漆関係、商品開発、地域創生といった回答が見られた。対面では「漆の教室」「デザイン事務所」も挙げられ、漆や工芸を活かした多様なキャリア志向が確認された。

「漆や伝統工芸に関わる可能性があるか」では、アンケート10件中5名が「ある」と回答。対面でも複数の学生が、漆・工芸の技法を将来的な表現素材やデザインの一部として活用する可能性に言及しており、「完全な職人志望」ではなく「技術を活かした企画・デザイン・教育・地域貢献」の形で関わりたい層が多いことが分かった。

2) 働き方・ライフスタイルに関する志向

「理想の働き方・ライフスタイル」では、自営業・フリーランス・副業型・作家活動と仕事の両立といった志向が多く、「安定性」と「自己表現」の両立が理想とされている。対面でも「作家だけで生活する人は一部なので会社勤めと両立したい」「会社勤めをしながら作品制作を続ける」という声が聞かれ、伝統工芸の世界と現代的な働き方をどう調和させるかが鍵となることが浮き彫りになった。

3) 伝統工芸職人という働き方の「魅力」と「不安」

魅力(設問4より)としては、技術の習得・個人のスキル向上(複数)、文化の継承と社会

的意義、作家性・独自性のある仕事と認識されている。一方で、以下のような不安点（設問5）として、最も多かったのが、収入の不安定さであり、修行期間の長さ、人間関係や閉鎖的環境、作業の繰り返し、体力的負担が危惧されていた。

収入面では、「年収400～500万円以上であれば現実的」との回答が多数みられた（設問7）。また、収入以外の条件として「地域の雰囲気・人を受け入れる体制」「交流できる環境」「若者・移住者の受け入れ体制」などが挙げられた（設問8）。

4) 輪島塗の認知・イメージ・デザイン性

「輪島塗という名前を知っているか」では、アンケート10件中8件が「よく知っている」であり、高い認知度がある。対面でも「技法は文章では知っていた」「工房研修の話を聞いたことがある」など、概念としての認知が高い一方、技術や実践となると距離を感じている様子も見られた。

輪島塗のイメージとしては、美しい、繊細、高度な技術、堅牢（複数回答）、厳格で格式が高い、アートの要素を含む、といった回答があり、漆器としての認識にとどまらず、アート・文化資源としての捉え方もあることが分かった（設問10）。

デザイン・色合いについては、黒・朱・金といった伝統色のイメージが多く挙がる一方、「生活デザインとして使いづらい」「現代の暮らしに合った形が増えれば可能性がある」といった意見もあり、クラシカルな印象と現代的な素材としての可能性が共存していることが確認された（設問11）。

5) 輪島への移住・滞在意欲と条件

輪島での滞在や移住に対して「興味がある」はアンケートでは1件と少ないが、「条件次第では可能」が6件と、可能性は否定していない（設問13）。

対面では、「輪島は入りづらいイメージだが、背景や実情がわかると不安は減る」「移住ではなく滞在型なら現実的」といった意見が多く、“移住”というより、“短期滞在”や“関わりを持つ”という新しい関わり方の可能性が強く示唆された。

6) 輪島塗の復興に必要とされるもの（設問15・16・17）

社会・仕組み面では、関係人口の増加、まちづくりとの連携、開かれた工房（見学・体験・学びの場）、観光や教育と結びつけた発信、一方、デザイン・商品面では、現代の生活に馴染むデザイン（圧倒的多数）、キャラクターや異分野とのコラボ、SNS・動画・ECなど販路の拡大が指摘された。教育・関わり方については、若者が参加できるプロジェクト型の学び、デザインや企画に関わる機会、「弟子入り」以外の学びの形（短期制作・共同企画など）が挙げられた。特に注目すべきは、学生の多くが「職人として継ぐ」だけでなく、デザイン・企画・プロデュースなど、新しい形で輪島塗に関わりたいと考えている点である。これは、従来の“弟子入り型”ではない、新たな継承モデルの必要性を示唆している。

4-1-5.今後への示唆

今回のワークショップとアンケートを通じて、以下の重要な示唆が得られた。

○明らかにになったポイント

- ① 関わりたい学生は多いが、関わり方がわからない
- ② 移住は難しくても、“関わる”ことは可能
- ③ 職人＝作るだけの人ではなく、企画・発信・教育の役割も期待されている
- ④ 輪島塗の価値は十分に感じられているが、現代生活との接点が不足している
- ⑤ 滞在型・プロジェクト型の“開かれた工房”が若者を惹きつける鍵になる

○今後に向けた提案（協議会が進めるべき方向）

- ① 短期滞在型ワークショップ（合宿型・制作型）
- ② 共同制作・デザイン提案型プロジェクトの実施（商品開発含む）
- ③ 「開かれた工房」や「シェア工房」の整備（弟子・研究者・企画者も訪れる場）
- ④ 大学との連携プログラム化（単位認定・短期留学型など）
- ⑤ 若者が“輪島に関わる”仕組みづくり（移住ではなく関係人口の確保）

以上

4-2.輪島塗復興協議会×多摩美術大学ワークショップ報告(260109)

4-2-1. はじめに

2026年1月9日、多摩美術大学八王子キャンパスにおいて、輪島塗復興協議会、輪島塗職人と学生によるワークショップが開催された。はじめに、本協議会から地震による輪島の被災状況の概要と輪島塗生産プロセスの説明がなされた。次に多摩美大から学生の卒業制作などのプレゼンが行われた。続けて2班に分かれてワークショップを行い、輪島塗の印象や職人への質問、現代デザイン手法をどう輪島塗に取り込んでいけるか、といった視点から、学生と職人・塗師屋・協議会関係者が直接対話し、今後の共創の可能性を考えた。

当日は多摩美術大学生産デザイン学科（プロダクト研究室）の濱田芳治教授をはじめ、現代デザインを専攻する3年生の学生25名が参加し、また輪島側からは、大工（塗師屋）、浦出（塗師屋）、水尻（作家兼職人）、中島（塗師屋兼職人）や、辻（椀木地職人）、山崎（沈金）、菅野（木地）、引持（椀木地職人）、協議会事務局（小林）、金沢大学の西野教授および同研究室学生2名が参加し、意見交換が行われた。

4-2-2. ワークショップの概要

対面ヒアリング調査：2026年1月9日 14：30-16：30@多摩美術大学八王子キャンパス

参加者：

多摩美大

生産デザイン学科プロダクト研究室 濱田芳治教授

社会連携部社会連携課兼大学戦略室 黒田雄記課長

社会連携部社会連携課兼大学戦略室 松田愛子氏

学生 25名（3年生）

本協議会

大工（塗師屋）、浦出（塗師屋）、水尻夫妻（作家兼職人）、中島（塗師屋兼職人）、
小林（事務局）

職人：辻（椀木地職人）、山崎（沈金）、菅野（木地）、引持（椀木地職人）

金沢大学：西野教授、研究室学生 2 名

4-2-3. ワークショップの結果

ワークショップの結果を以下に記す。

1) 震災の被害について

大工：輪島の地震被害。扉も外れて、ガラスも落ちていた。埃一つたてていけない場所もひどい状態。漆もこぼれて、被害額が大きい。もう 2 年経ったが、状況としてはよくなっていない。

水尻：朝市の写真。地震の倒壊後に火がつき燃えた。職人の方も亡くなった方がいた。

菅野：一軒家を借りていたが、一瞬にして潰れた。斜めになったことまでは覚えているが、それからは意識がなかった。目が覚めたら空が見え、助けを呼んだ。避難所までは歩けたが、そこからは寝たきり。骨盤と背骨と肋骨を骨折。地元福島で 2 ヶ月リハビリ。東日本の時も被災した。

水尻：耐震補強した小学校でも、これだけの被害がある。炊き出しの写真。缶詰とご飯だけ。1 ヶ月はこれで生活していた。

2) 輪島塗とは

輪島塗は“チームで作る工芸” 輪島塗は一人で全部を作るわけではありません。工程ごとに専門家がいて、リレーのように受け渡ししながら完成します。

木地職：木から形を生み出す

下地職：布着せ・地の粉と漆で丈夫さをつくる

研ぎ職：形を整える

塗り職：漆を塗り重ね、表面を整える

品色職：表面を平らに研ぎ上げ、磨き、鏡のようなツヤをつくり出す

沈金職：漆で塗り上げた表面に模様を彫る

蒔絵職：漆と金属粉で模様を描く

塗師屋：職人の仕事をつなぎ、品質と仕上げを見届け販売する存在

作家：伝統の技を土台にしながら、新しい表現やデザインに挑戦する役割

作品としての魅力を広げる存在

それぞれが一生をかけて一分野を極める一

これが輪島塗の最大の特徴です。その技と仕上がりを目で見えて感じてください。

浦出：輪島塗の技術を使って作る、輪島塗以外のものもある。輪島塗を身近に感じてもらいたい。

3) 多摩美大生の作品紹介

A さん：卒業制作子供が遊ぶツール。瞬時に場を展開できるもの。一枚の紙を広げたり折り

たたんだりして、子供たちが自分で考えて遊ぶ場所や勉強する場所を作る。

Bさん：珪藻土粘土のオブジェ。珪藻土の性質を利用する。ホテルのホールなどに置いて、濡れたコートなどを

Cさん：テープカッター

どの幅のテープにも対応できるテープカッター。みんなに試してもらったら、人によって使い方や置き方が違った。一つのものでも様々な使い方ができる。

Dさん：なみなみの刺繍の抱き枕

肌に触れた時に早く暖くなる。凹凸があることで通気性もある。さまざまな布で作り、最適なものを追求した。

Eさん：お弁当袋のリデザイン

お弁当袋は持ち運ぶのが面倒、場所をとるなどネガティブな印象。色々なものを入れられる。

Fさん：タイの自閉症の子供と一緒に作った。刺繍を作ってもらい、実際に販売。子供達に自信をつけてもらいたい。

Gさん：バックハンガー テーブルにカバンを掛けるための道具。

Hさん：つたを編んで縄跳びを作る。ものづくりの本質、環境に合わせてものを作ることを考えた。つたを継いで作った。

Iさん：自然素材だけで作ったマンドリル 森に置いておくと自然にかえる。あえて自然の鮮やかさを見せる

Jさん：窓辺をディスプレイとして見せる。

4) ディスカッション「デザインについて」

A.班 参加者：学生 13名、多摩美術大学教授、輪島塗関係者 4名

学生：全国各地の漆産業が協力して事業を行うことはある？

輪島塗 A：全国漆協会というものはある。石川県と香川県には全国に二か所のみの漆の学校があるため、皆そこで学んで地元に戻っていく。協力して産業を、ということは今のところない。理由としては産業の規模が縮小傾向にあるためであり、日本の漆産業自体の危機。輪島は比較的大きい産地であったが震災を機に産業の危機がさらに進んでいるため復興協議会などの活動をしている。

学生：工程を知ると手間暇かけて作られていることがわかり、その割には意外と安いのではないかと思った。ただ、若い人が買おうと思うには加飾の部分などでもっと工夫ができそう。

学生：自分自身輪島でボランティアを行った経験があり、卒業設計では漆を扱っていた。それを踏まえて、輪島塗の制作過程にどのくらい時間がかかるのかをもっと世にアピールしていく必要があると考える。

学生：高校時代に「漆風怒濤」などの輪島塗の展示会に行きたいと考えていたが、その矢先に震災が起こってしまい行けなくなりました。器などの伝統的な漆品から外れた作

家さんの作品に衝撃を受けたのだが、そういった作家さんの作品についてはどう考える？

輪島塗 A：輪島塗とは、肯定・技法・材料などが定められているため、作るものや色がどうしても限定的になってしまい、自由な表現がしにくい。作家は材料を変えてみたり、工程の一部を飛ばしたりして自由な表現をするが、やはりそれは輪島塗とは呼べなくなってしまう。表現の自由さとお客様に届けるプロセスの両立を図れる仕組みづくりが必要。

学生：工程が多く、それぞれの職人さんにこだわりがあると思うが、塗師屋さんの指示通りにいかなかったり、意見が割れることはある？

輪島塗 A：ある。例えば下地の人が木地の出来栄えに納得がいかなかったりする。しかし、全員がこだわりを持ってダメ出しなどもしっかりして前の行程に戻ってやり直したりすることが結果的に質を上げることにもなる。分業制の良いところでもあり悪いところもある。そこを調整するのが塗師屋さんの重要な役割でもある。

輪島塗 B：前の工程に戻すということは自分の技術が足りないということにもなりかねないのでほとんどやらない。最近は金の高騰などもあるので値段でぶつかることもある。あとは上塗りと中塗りの間で剥けやすい、薄いなどと思うこともある。節があったりするとすぐに言われたり。厳しさは職人さんによって異なる。

学生：輪島塗の名前しか知らない人が多いと思うので、輪島塗の技術を活かした若者向けの作品などが技術を知ってもらい入口になりそう。

学生：先ほどの講義で上塗りは準備が 7 割と言っていたが、例えば作業場にほこりが入らない機械など、最新技術の導入についてはどう考えているか。

輪島塗 A：最新技術を取り入れようという人はいるにはいる。やったら便利と理解はしているものの資金的余裕がなかったり、皆さん自宅を工房にしている人が多いので自宅で大規模な改修ができなかったりという問題が輪島の職人にはある。取り入れたいと思っている人は少なくない。

学生：大学一年生で漆を扱う授業があり、その時に、漆は手間はかかるが楽しいと感じた。一般の方が漆を体験できるワークショップなどはある？

輪島塗 A：かぶれるので基本的に漆を触って体験してもらうのは難しい。観光資源にするという案もあるにはある。加飾などの行程は体験してもらいやすいかもしれない。

輪島塗 B：青山三丁目のスクエアに沈金教室があり、探せば東京でも体験できる場所は意外とある。

輪島塗 A：あとは、地元の高校生には体験ワークショップを実施したことがある。

学生：工程の多さに驚いた。職人さんたちの叡智の集結だと感じる。こだわりを持っているが最新技術への抵抗などはないのか気になった。

学生：産業の危機に陥ったことは今回が初めてではないと思うが、今までそのようなタイミングで技術革新などはあったのか？

輪島塗 A：自分が知る限りはない。皆さんもご存じの通り輪島塗は日常使いのものからバブルを機に豪華になり、バブル崩壊後は産業が右肩下がり。震災を契機に革新を起こしたい

と考えている。

学生：工程が専門的に分かれていることを初めて知ったのだが、塗師屋さんはなぜ塗師屋になったのか、原点は？

輪島塗 A：塗師屋元々は職人で作業と販売を行っていた。作業を他人に依頼するようになったのが現在の塗師屋。作家は行程全てを自分で行ったりすることが多い。そのため塗師屋は屋号で作家は個人で行っていることがほとんど。

学生：材料不足や価格高騰などはある？

輪島塗 A：ある。そのため作品の値段も高騰していく。作れなくなることはないが、高くなった商品が売れるかはわからない。日常生活の変化が塗り物の売り方にも影響してきている。職人の高齢化などの問題もあり、若い人への仕組みづくりが必要。

学生：輪島塗という名前だけは知っていたが、もっと身近に感じられるコラボやイベントがあると良い。

輪島塗 A：輪島塗は地のものだが、率直にはイベントや出張は意外とある。ただ、百貨店の催事などが多いため、百貨店自体の訴求力が下がっているのも問題。

緒方さん：武家社会の崩壊や戦時下でパトロンの変化があったが、産業は基本的に国や政治とのかかわりが深かったように思える。失われた 30 年との並走を感じた。その中で市民の中から産業を変えていくという姿勢を感じた。伝統工芸の枠組みを変えるということも大切だと思う。

輪島塗 A：まとめている人達の輪島塗への執着というのも考える点ではある。

濱田教授：何を優先して施策を進めるかが重要。例えば周知させるにしても今の人に伝わればいいのか、長期的になのかなど。全部の施策を進めていくのは大変だと思うので今やっていることの中で何がどのくらい有効かを見極めることが大切だと考える。木地屋さんが高級積み木セットを売るなどでもいいし、結局はどこで旗を上げるかがクリエーション。デザインとは新しいものでどう人の心を掴むかであるが、持続的にやるためにはどうしたらいいのか、伝統工芸として今の物とどう戦うのかなども考える必要がある。

B.班：学生 12 名、西野教授、輪島塗関係者 4 名

西野：協議会が復興計画を作るお手伝いをさせていただいている。まずは自己紹介を。職人さんはお名前、職種。学生さんはお名前と学年と学科を

学生：全員プロダクト学科の 3 年生

輪島塗関係者：職人、蒔絵、沈金

輪島塗関係者：指物木地の職人

輪島塗関係者：塗師屋に憧れて会社をやっている

輪島塗関係者：塗師屋、下地職人

輪島塗関係者：椀木地の職人

西野：学生は輪島塗の感想や質問、職人さんは学生の作品を見ての感想を。

学生：新しく県外からやりたがる人はいる？

輪島塗 A：私は福島出身で、輪島塗をしたくて輪島に来た

西野：研修所は漆器の技術を学ぶ場所。

学生：漆という素材に触れたことがないので、特性がわからない。どういうことができるのか。

西野：デザインについて、輪島塗と同コラボできるかという考えを最後に聞くので教えて欲しい。学生：工程を飛ばしたりもする？

輪島塗 B：上塗りで一旦完成する。そこから呂色で磨いて艶を出したり、沈金、蒔絵などを行う。

先ほどの漆の特性について、漆は接着剤にもなる。紫外線や乾燥には弱い。

学生：石川県に住んでいたが、輪島塗を販売しているところがない。輪島塗はどこに行ったら買える？

輪島塗 C：今までは百貨店が多かった。塗師屋さんによって売っている場所が違う。例えば輪島塗 A さんは寺がメイン。

輪島塗 B：僕の場合は、百貨店、金沢の小売店、観光で輪島に来た人に販売。

輪島塗 C：やっぱり輪島塗は百貨店がメインだが、輪島塗以外の漆器作品はギャラリーなど色々な場所で買える。

学生：上塗りまでの工程は想像できる。加飾の工程は、あらかじめ決まった模様を入れる、つまり最初から目的が決まってそれに向かってみんなで作っているのか、それとも作っていく過程で、これにはこの絵を描こうみたいになるのか？

輪島塗 D：塗師さんが最初からデザインをプロデュースする。

学生：作っている途中で、これには絶対龍じゃないだろみたいなことにはならない？

輪島塗 C：作家さんの場合はそれで変更する場合もあると思う。

学生：輪島塗の衰退はどういう状況か？

輪島塗 E：もともと高齢化していたが、震災でさらに減った。生産量も減っている。

輪島塗 B：人が減っているということは売り上げも減っている。

西野：バブルの頃が輪島塗の生産額が一番多かった時期。その後のリーマンショックで、当時の 2,30 代の職人がやめたので、今の 4,50 代が少ない。

学生：デザインの型みたいなものはある？それとも毎回考えている？

輪島塗 C：古典的なものは、冠婚葬祭で使われる縁起の良いものは決まっている。現在は新しいデザインも多く出されている。

学生：制作にかかる時間はどれくらい？

輪島塗 B：木地だけで 1 年から 1 年半かかる。木地が出てきたところからだと 8 ヶ月くらい。漆は乾燥に時間がかかる。

学生：職人・塗師屋になったきっかけは？工程の好きなところは？

輪島塗 E：代々木地屋で、木地は必要な機械も多くなかなか入って来にくい職種。昔から見ていて、ものづくりに関わりたいと思った。

輪島塗 B：うちももともと漆器屋で、販路などがあったので今仕事ができている。塗りの職人が足りないと思ったので、研修所に行って学んだ。

輪島塗 C：3年前に輪島に戻ってきた。職人さんには及ばないが、プロデュースして販売は結構誰でもとっかかりやすい。

輪島塗 A：ものづくりが好きで始めた。流れ着いた。

輪島塗 B：家が沈金で、父は研修所の先生。だが、この仕事が嫌いで、最初は別の仕事を。その仕事の際、漆芸家と関わり、やっぱりうちの実家いいじゃんってなった。

学生：漆を木以外に塗ることは可能？

輪島塗 B：もちろんできる。ガラスに塗ったり、布だけで形を作る乾漆というものもある。

学生：逆に漆が塗れないものはある？

輪島塗 B：ガラスはもともと塗れなかったが、ガラス用の漆が開発された。なので基本的に何にでも塗れる。昔は甲冑に塗られていたりもした。

学生：輪島塗を伝統工芸として若い人に伝えたいのか、年配の人に伝えたいのか、海外の人に日本の工芸として伝えたいのか？

輪島塗 B：まずは若い人に伝えたい。そして、海外にも展開できれば。

西野：現在デザイン手法を学んでいると聞いたので、輪島塗とコラボしたら良い手法などあれば教えてください。

学生：形に制限はあるか？

輪島塗 B：木をベースにしないものならどんな形でもできる。

学生：輪島塗の中で何が一番売れてる？

輪島塗 B：うちはお椀が一番売れている。アクセサリなどは安いので最近よく売れている。

学生：輪島塗のお椀を持っているが、用途が限られている。もっとよく使うものを作ったら良いのでは。

西野：例えば何が良い？

学生：照明。ガラスに塗れるので。

学生：失敗した時はどうする？

輪島塗 B：やり直す。

学生：失敗しても別のものとして売れそう。

西野：お客さんが使っていて、壊れたら、修理ができるのが輪島塗。それが大量生産大量消費のものとの違い。

学生：輪島塗は高級なイメージ。そのイメージをくずさない方がいいのでは？若い人は一点物とかが結構好き。私はこれが一つしかないと言われたら買いたい。

触っているものに漆が使われていたらテンションが上がる。例えばスマホケースなど。

西野：輪島塗を買うとして、店頭に並んでいるものから好きなデザインを選ぶ方がいいのか、オーダーして買いたいのか。

学生：職人さんのこだわりがあると思うので、店頭で一点物と運命の出会いをしたい。

学生：完成系を決めずに作るのもいいのでは？今は用途に合わせてものを作っているが、例えば、この木はこの形にした方が良く、そしたらこの絵を付けよう、とか。

作家さんとの違いは人がたくさん関わっていることなので、職人さんの意思が入った方が良くと思う。

輪島塗 B：職人さんの意思は基本的に入らない。

輪島塗 E：塗師屋さんの仕事は、頼まれたものをただ作る。デザインに関して言うことは無い。

西野：職人さんは、お椀を 100 個作れと言われてたら、全く同じものを早く正確に作る。木に合わせて作るのは作家さんの方。ですよね？

辻：そうですね。でも、作家さんも木地から全部やる人はほとんどいない。木地だけ木地屋さんに頼むとか。

西野：菅野さんはどうですか？

輪島塗 A：私は塗師屋さんからの仕事と自分の作家としての仕事を両方やっているが、塗師屋さんの仕事は、注文通りにきっちりやっている。作家の作品は、自分で考えながらやっている。

西野：作家と職人の仕事を菅野さんみたいに自分で住み分けている人もいる。

学生：今の和っぽい雰囲気を崩して、違うものとコラボするのが、最近の伝統工芸のよくあるやり方。でも、それを売っているサイトを見つけにくい。もっと見つけやすくすればいい。

学生：漆は接着剤としての役割もあると言っていたので、本の接着などに使えるのでは？普段使っているノートなどに使われていたら馴染みが出る。本だけでなく、接着剤としての用途で何かできそう。

輪島塗 B：金継ぎとかもその類。

学生：写真で見ると、黒が映えている。艶がすごい。上品さを出しているが、それが触れづらさにもつながっている。なので、ワンアクセントで使う方がいいのでは。例えばぬいぐるみの目とか。

西野：確かに漆黒は写真に撮りづらいとよく言う。

学生：職人になるのも、代々やってないとなりづらいと先程言っていた。WS とかでもっと体験してもらうことで、職人になりたいと思ってもらえばいいのでは。例えば木地があって、下地を体験して、その後上塗りさんにまた引き継ぐなど。自分が工程の一部になっている感覚を味わえる体験が良いのでは。

学生：身近に使っている製品に漆が使われていたら良い。

4-2-4. ワークショップの分析

○学生からの質問

● 輪島塗職人について

- ・新しく県外から来て輪島塗をやりたいという人はいるのか？

- ・職人・塗師屋になったきっかけは？自分の工程の好きなのところは？
- ・工程が専門的に分かれていることを初めて知ったのだが、塗師屋さんはなぜ塗師屋になったのか、原点は？

● 製作工程・材料について

- ・漆という素材に触れたことがないので特性がわからない。どのようなことができるのか？
- ・輪島塗は工程が多いが、工程を飛ばすこともあるのか？
- ・加飾は、最初から決まっていてそこを目指してみんなで作っていくのか、それとも、作っていく過程でこの器にはこの絵を描こうみたいになるのか？
- ・デザインの型みたいなものはあるのか？それとも毎回考えているのか？
- ・漆を木以外に塗ることは可能？逆に漆が塗れないものはある？
- ・制作にかかる時間はどれくらい？
- ・形に制限はあるか？
- ・失敗した時はどうする？
- ・材料不足や価格高騰などはある？
- ・工程が多く、それぞれの職人さんにこだわりがあると思うが、塗師屋さんの指示通りにいかなかったり、意見が割れることはある？
- ・例えば作業場に埃が入らない機械など、最新技術の導入についてはどう考えているか？

● 輪島塗の産業面について

- ・輪島塗の衰退はどういう状況か？
- ・全国各地の漆産業が協力して事業を行うことはある？
- ・器などの伝統的な漆品から外れた作家さんの作品に衝撃を受けたのだが、そういった作家さんの作品についてはどう考える？
- ・産業の危機に陥ったことは今回が初めてではないと思うが、今までそのようなタイミングで技術革新などはあったのか？

● 市場・販路について

- ・石川県に住んでいたが、輪島塗を販売しているところが少ない。どこに行けば買える？
- ・輪島塗を伝統工芸として若い人に伝えたいのか、年配の人に伝えたいのか、海外の人に日本の工芸として伝えたいのか？
- ・輪島塗の中で何が一番売れてる？
- ・一般の方が漆を体験できるワークショップなどはある？

○学生からの提案

● デザインについて

- ・輪島塗のお椀を持っているが、用途が限られている。もっとよく使うものを作ったら良いのでは。ガラスにも塗れると聞いたので、例えば、照明とか。
- ・触っているものに漆が使われていたらテンションが上がる。例えばスマホケースなど。
- ・完成系を決めずに作るのもいいのでは？今は用途に合わせてものを作っているが、例え

ば、この木はこの形にした方が良く、そしたらこの絵を付けよう、とか。

・漆は接着剤としての役割もあると言っていたので、本の接着などに使えるのでは？普段使っているノートなどに使われていたら馴染みが出る。本だけでなく、接着剤としての用途で何かできそう。

・写真で見ると、黒が映えている。艶がすごい。上品さを出しているが、それが触れづらさにもつながっている。なので、ワンアクセントで使う方がいいのでは。例えば、ぬいぐるみの目とか。

・身近に使っている製品に漆が使われていたら良い。

・工程を知ると手間暇かけて作られていることがわかり、その割には意外と安いのではないかと思った。ただ、若い人が買おうと思うには加飾の部分などでもっと工夫ができそう。

● 販売戦略について

・失敗しても別のものとして売れそう。

・輪島塗は高級なイメージ。そのイメージをくずさない方がいいのでは？若い人は一点物とかが結構好き。私はこれが一つしかないと言われたら買いたい。

・輪島塗を買うとしたら、店頭で並んでいるものから好きなデザインを選ぶ方が良く。職人さんのこだわりがあると思うので、店頭で一点物と運命の出会いをしたい。

・今の和っぽい雰囲気崩して、違うものとコラボするのが、最近の伝統工芸のよくあるやり方。でも、それを売っているサイトを見つけにくい。もっと見つけやすくすればいい。

・職人になるのも、代々やってないとなりづらいと先程言っていた。WSとかでもっと体験してもらうことで、職人になりたいと思ってもらえばよいのでは。例えば、木地があって、下地を体験して、その後上塗りさんにまた引き継ぐなど。自分が工程の一部になっている感覚を味わえる体験が良いのでは。

・輪島塗という名前だけは知っていたが、もっと身近に感じられるコラボやイベントがあると良い。

輪島塗の名前しか知らない人が多いと思うので、輪島塗の技術を活かした若者向けの作品などが技術を知ってもらう入口になりそう。

・輪島塗の制作過程にどのくらい時間がかかるのかをもっと世にアピールしていく必要がある。

4-2-5. ワークショップの総括

学生からは、輪島塗に関して、職人、制作工程、産業面、市場販路に関する質問があった。また、提案として、現代的デザイン手法を用いた輪島塗とのコラボレーションの可能性や新たな販路拡大に関して自由な意見が聞かれた。今後の協働の可能性が見いだされたワークショップであった。

4-3.歌舞伎座展示会実施報告(260110-11)

1) 展示会概要

名称：WAJIMANURI EXPO2026 輪島塗・輪島の漆芸を知る展示会

期間： 1日目：13:00～18:30、2日目：10:30～17:30

会場：歌舞伎座タワー5F〈歌舞伎座ホール〉

主催：輪島塗復興協議会

2) 参加者

職人（輪島）13名、塗師屋1名

協議会7名：大工 治彦、浦出 真由、中島 悠、水尻 直子、水尻 幸太、小林 将、竹原 淳

大学（教授・准教授）4名：西野 達也、野村 和宣、塩脇 祥、川西 敦史

学生（金沢大学3名岡山大学4名神奈川大学4名）11名

3) 来場者数

本展示会では入場口にてカウンターを使用し、来場者数を計測した。

来場者数合計：903名

1日目（13:00～18:30）：364名

2日目（10:30～17:30）：539名

短時間の立ち寄りではなく、多くの来場者が会場内に長時間滞在していたことが特徴的であった。

4) 展示構成と来場者の動き

本展示会は、一般的な百貨店等で行われる物販中心の催事とは異なり、「輪島塗・漆芸の生業（なりわい）を知ってもらうこと」を主眼に構成した。

主な展示要素

- ・輪島塗・漆芸の工程見本展示
- ・職人による実演
- ・大学（複数校）による調査・研究・聞き取り内容の展示
 - 神奈川大学：輪島塗の歴史や生業を展示
 - 岡山大学：職人毎の工房を立体で展示
 - 金沢大学：聞き取り調査で得た言葉をパネル展示
- ・輪島塗および漆芸作品の展示

5) 来場者の行動傾向（体感）

来場者の7割以上が1時間程度滞在し、職人の説明を長時間聞いていた

実演や大学の展示コーナーを見た後、再度作品展示に戻る来場者が多く見られた

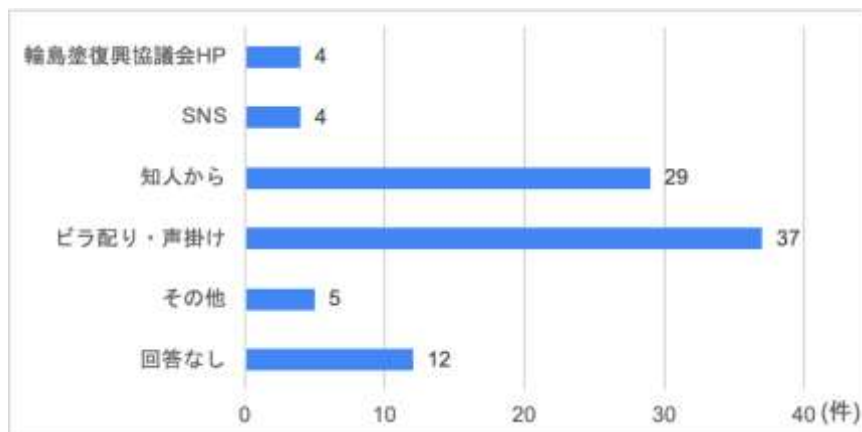
実際に作品に触れてもらうことで、輪島塗や漆芸作品への理解が深まっていた

6) 来場者アンケートについて

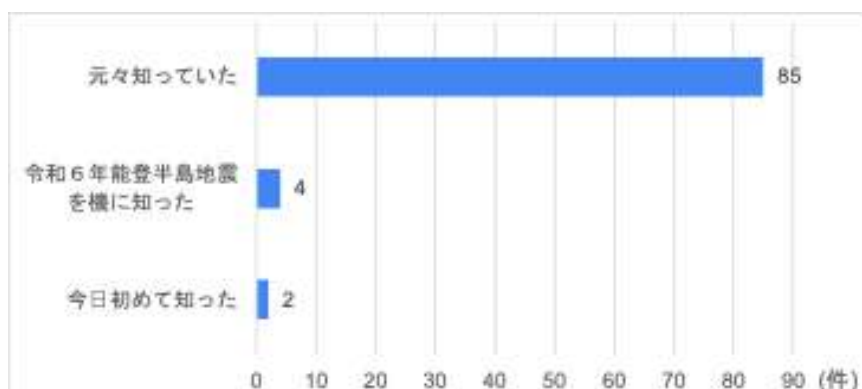
・会期中、来場者アンケートを実施した。今後、来場者の理解度や印象の変化、関心分野等を整理し、次回以降の展示・事業展開に反映する。回答数は、1日目(1月10日)：紙面

による回答 49 件、2 日目(1 月 11 日) : Google フォームによる回答 42 件の合計 91 件であった。

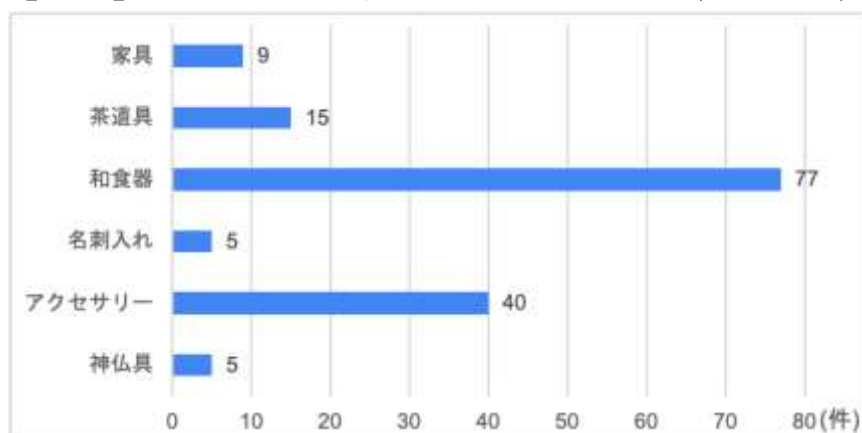
【設問 1】 今回の展示会をどこで知りましたか？



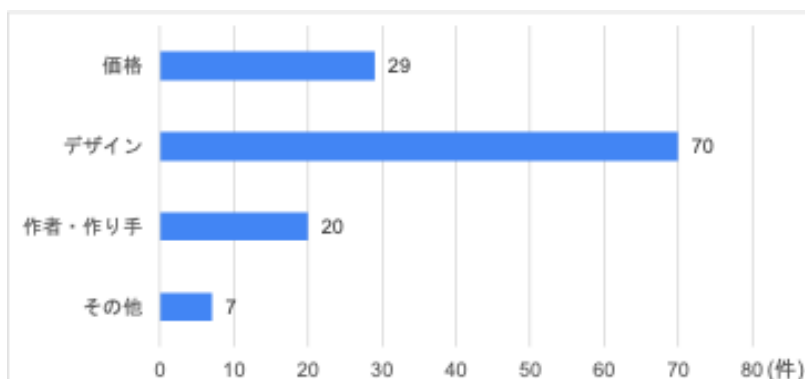
【設問 2】 輪島塗という伝統工芸を知っていましたか？



【設問 3】 どのような輪島塗製品に興味がありますか？(複数回答可)

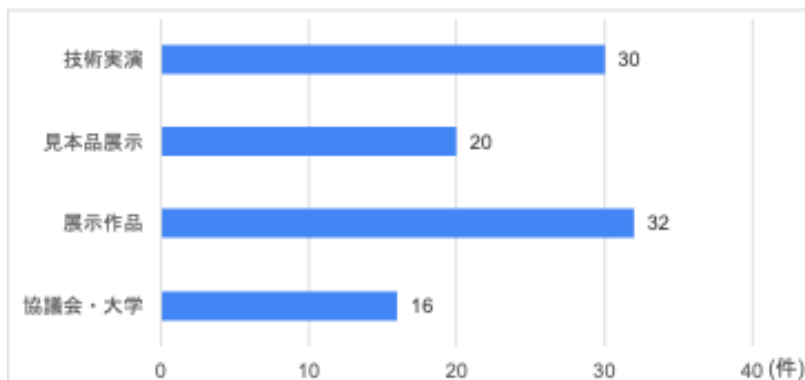


【設問 4】 輪島塗のような伝統工芸品の購入を考える際、何を重視しますか？(複数回答可)



その他：使い勝手, 使いやすさ, 実用性, 用途, 耐久性, 保存の仕方, 作品・製品が持つストーリー, 派手でないもの

【設問 5】 どの展示コーナーが印象に残りましたか？(複数回答可)(1日目のみ質問)



【設問 6】 輪島塗とコラボを行うと良いと思う作品やブランドがあれば教えてください。

ドールハウスなどのホビー, FF14 コラボ第二弾, エルメスのネックレス, HARIO のアクセサリー工房, ポケモン, もっと色々な種類のピアス, 海外一流ホテルの客室やロビー, オフィスの室内の物品, アクセサリー, 文具, 靴, 楽器, 海外のハイブランド, ファンデのケース, シュウウエムラの容器, 高級な酒屋さんや料理屋さん, 洋服関係, 宝飾の一流ブランド, スマホケース, 表札, かごやバスケット類, カトラリー系, 歌舞伎, 歌舞伎関連のグッズ, 無印良品, リラックマ, 日本のサブカルコンテンツ(特にゲーム, アニメ, 海外のジャパンエキスポにアニメコンセプトの何かを出すとか), アイドル推し文化(推し色とか, 推しのコンセプト), イタリアの工藝, Apple, Google, コムデギャルソン, ルイヴィトン, SEIKO の置き時計, 腕時計, 缶バッジ, ピンバッジ, 展示されていた雛人形が良かった, バインダー, 筆立て, ブローチ, 指輪, メガネたて, 草間彌生, ユニクロ, ソニー, 任天堂, 着物の小物, インテリア, 腕時計(グランドセイコーなど), 会津塗, レストランとのタイアップ 以上

7) 参加職人の感想

展示会終了後、参加した職人・関係者から感想を聞き取った。

本展示会は、普段の販売会とは異なり、来場者との対話や反応を直接感じられる機会となり、職人自身の意識や仕事への向き合い方にも変化をもたらした。

・参加者 1

普段の販売会では来場者と直接言葉を交わす機会が少なく、自分の仕事にここまで強い関心を持ってもらえているとは、これまで気づいていなかった。工程見本を示しながら作業内容を説明したうえで作品を見てもらうことで、来場者の理解や反応が大きく変わることを実感した。自分の仕事を伝えながら作品を見てもらうことが、これほど楽しい体験になるとは思っていなかった。

・参加者 2

普段はお客様と直接話をするのがほとんどなく、今回の展示会では多くの来場者が強い興味をもって話を聞いてくれたことがとにかく嬉しかった。工程や役割を説明すると、驚きや納得の表情を見せてくれる場面も多く、自分の仕事が確かに誰かに届いていることを実感できた。この経験を通して、改めて自分の仕事に誇りを持つことができた。

・参加者 3

歌舞伎座という市外・県外の来場者が多い場所で開催したことで、これまで市内では聞くことのできなかつた率直な意見や反応に触れることができ、大きな学びとなった。チラシ配布や呼び込みの中では厳しい言葉を受ける場面もあったが、一方で温かい励ましの声もあり、外に出て初めて輪島塗がどのように受け止められているのかを実感した。甘えることなく、自分たち自身で伝えていかなければならないという意識が強くなった。

・参加者 4

職人による直接の説明や工程展示、工房模型、大学による聞き取り調査の掲示などを組み合わせることで、来場者にとって現状が非常に伝わりやすい展示構成になっていたと感じた。輪島塗を詳しく知ってもらう中で、現状や課題についても自然に話すことができ、理解を深めてもらったことが良かった。また、輪島塗を知らなかった来場者が「きれいだったね」と話しながら会場を後にする姿を見て、確実に何かが伝わったと感じられた展示会だった。

・参加者 5

普段は工場で作業をしているため、東京で直接呂色の工程を伝えられたことを嬉しく思った。輪島塗の現状や技法について、少しでも興味を持ってもらったのであれば良かった。一方で、初めての出演でもあり、より分かりやすく伝える工夫の余地があると感じ、次回への課題も見えた。

補足的な気づき・考察（職人・関係者の声より）

- ・ 普段は価格を理由に敬遠されがちな場面も多いが、本展示会では多くの来場者が価格以前に興味を持ち、話を聞いてくれた

- 呂色の実演については、作業内容が分かりにくい部分もあり、今後は沈金や蒔絵のように工程見本等を併用する工夫が必要と感じた
- 物販を目的としない展示品については、作り手の意図や背景を十分に伝えきれなかった点が今後の課題として挙げられた

8) 総括的な所感

歌舞伎座という場所で実施したことで、来場者の多くが実演や職人の説明に強い関心を示し、長時間滞在する姿が多く見られた。一方で、文化的関心の高い層であっても、輪島塗の詳しい内容は十分に知られていない現状も改めて浮き彫りとなり、「輪島塗を知ってもらおう」取り組みの重要性を再確認する機会となった。また、来場者層は当初想定していた高齢層だけでなく、30～50代の来場者が多く、日本の工芸への関心の広がり、今後の可能性を感じさせる結果となった。輪島の復興が進むまでの間、都内や他都市でも継続的に開催していく意義を強く感じている。

9) 展示会を通じて得られた成果と気づき

- 単なる販売ではなく、工程・背景・生業を伝える展示が、来場者の理解と関心を深めることを確認できた
- 「知る→見る→触れる→再度作品を見る」という循環型の鑑賞行動が自然に生まれていた
- 来場者・職人双方にとって、輪島塗・漆芸の価値を再認識する場となった

10) 会場提供者（歌舞伎座）からの評価と今後に向けた提案

本展示会の終了後、会場提供者である歌舞伎座関係者より、以下の評価および今後に向けた前向きな意見をいただいた。

- 本会場において、これほど多くの来場者が訪れた展示会はこれまでになかった。来場者の滞在時間も長く、会場全体に活気があり、展示内容と来場者の関心の高さが非常に印象的であった。ぜひ次回も開催してほしいとの評価をいただいた
- 次回開催時には、歌舞伎座全体として応援・協力したいとの意向が示された
- また、次回以降の展開案として、以下の具体的な提案も寄せられた。

展示会開催の約1か月前から、歌舞伎座内レストランにおいて輪島塗と連動したコラボレーション料理の提供を行うこと

歌舞伎座地下の木挽町広場にて、輪島塗・漆芸作品の販売コーナーを設置することも可能であるとの提案

これらの評価および提案は、本展示会が文化的価値・集客力の両面において高く評価された結果であり、今後の継続的な取り組みや発展的展開につながる重要な成果である。

11) メディア資料

BS日テレ（SNS、3月4日放送）・東京新聞（オンライン）・中日新聞（新聞）・北國新聞（新聞）

記事紹介



12) 記録写真 ※以下に展示風景・実演・会場全景・来場者の様子等の写真を掲載





4-4. 輪島塗職人および関係者ヒアリング内容の要約

以下に輪島塗職人および関係者へのヒアリング調査の要約を記します。
表はヒアリングに用いた質問項目を示しています。

表 2-1-1. ヒアリング調査における質問項目

| | 調査項目 | 質問項目 | 質問 |
|---|-----------------|--------------------------|--|
| 1 | 年齢 職種 | 年齢と職人歴 | まず年齢と職人歴をお伺いしてもよろしいでしょうか |
| 2 | | 職種（木地、下地、上塗、研ぎ、加飾） | それはどんな作業でしょうか、簡単にご説明をお願いします |
| 3 | 被災 前後 の実態 | 輪島の町中における生産者ネットワーク分布の変化図 | 被災前の工場の屋号と住所（又は場所）を教えてください |
| 4 | | | 工場の被災状況として、罹災証明区分は何でしょうか また具体的な被害はどのようなものでしたでしょうか |
| 5 | | なにが生産体制再建上のボトルネックになっているか | 現在工場は生産再開されていますか、休止されていますか？ その住所と場所をご教示下さい |
| 6 | | | 現状における生産上のお困りごとは何でしょうか？ （関連して、輪島塗の業界に対しての意見や要望はありますか？ どのようにすれば良くなると考えていらっしゃいますか？ 公的機関に対して、どのような支援を期待されますでしょうか？） |
| 7 | | | （生産休止中の場合に聞く）生産再開のご予定はありますか |
| 8 | | | （塗師屋さんに対しての質問）生産工程は分業されていますが、各工程の職人さんの被災状況は如何でしょうか？ 各工程の職人さんの屋号と、地震前の工場の住所と現在の工場の住所や場所がわかれば教えてください |

| | | |
|----|--|---|
| 9 | | 次に生活上のお話しをお伺いします。現在の生活上のお困りごとはございますでしょうか |
| 10 | | (住まいが別の場合に聞く) 地震前のお住まいの場所(住所)と同居されていた方の世帯構成をご教示下さい |
| 11 | | (住まいが別の場合に聞く) お住まいの被災状況として、罹災証明区分は何でしょうか。 また具体的な被害はどのようなものでしたでしょうか |
| 12 | | (住まいが別の場合に聞く) 現在のお住まいの場所(新住所)はどちらでしょうか。ご家族皆様でお住まいでしょうか? |
| 13 | | (輪島を離れた職人さんに聞く) 輪島に戻る条件は何でしょうか? ご家族が離ればなれになっているケースはありますか |

| | 調査項目 | 質問項目 | 質問 |
|---|----------|---|--|
| 1 | 作業 空間 | 住まいと工房の関係性の把握 | 輪島塗の工房と住居はどのように使い分けてきましたか?(昔、震災前、震災後、理想) |
| 2 | | 工程別による工房の特徴 | 作業部屋の広さはどのくらいですか。(何畳、何平米) |
| 3 | | 作業空間のレイアウトの把握 | 作業場における、家具の配置、必要スペース、種類を教えてください。こだわりや工夫があれば教えてください。 |
| 4 | | | 作業場における、道具の種類・数、配置、収納の必要スペースを教えてください。 |
| 5 | | | 作業場における、部屋の各スペースの配置を教えてください。分け方で作業効率や品質にどんな影響がありますか?(作業・保管スペースなどの配置) |
| 6 | 作業環境 | 作業環境と外部環境の関係 作業場の環境の変化の把握 作業環境の災害による変化の把握 | 作業環境について不便に感じていること、こだわり |
| | | 作業環境維持と建物の影響 | 仕上げ材と設備の種類 |

| | | | |
|----|----------|-----------------|--|
| 7 | 作業 動線 | 作業空間の使い勝手を把握 | 部屋内の使い勝手を教えてください 例) 人的: 家族も作業場を通るので集中できない 建物: ○○部屋と□□部屋が遠いから作業しにくい |
| 8 | | 作業部屋での動線を把握 | 部屋内の作業動線を教えてください。 |
| 9 | 変化 | 作業環境の災害による変化の把握 | 災害前後において作業環境の変化、作業場の環境に関する変化はありますか。 |
| | | 作業環境の時代による変化 | 作業環境維持の方法と設備の変化 |
| 10 | 伝承 | | 言い伝えなどによる昔の工房の環境(昨今との違い)に関する情報(特定の工程の工房が集まっていた、住居と作業場の関係、作業環境など) |
| 11 | 生活環境 | 作業場が生活に与える影響の把握 | 作業・作業環境への配慮が生活環境に与える影響はありますか(音、匂い等) |
| 12 | 生活空間 | 作業場と生活の関係性の把握 | 作業空間周辺の部屋の用途、生活空間の配置、生活空間の配置について作業空間への配置、またその区切り方 |
| 13 | 生活動線 | | 作業動線との交錯 |

| | 調査項目 | 質問項目 | 質問 |
|---|--------------|-----------------------------------|--|
| 1 | ワークスタイル | 生活の中での適正な作業量の把握 作業による生活への影響の把握 | 作業スケジュールと生産の流れについて、震災前と今とでどのような変化があったか教えていただけますか?(作業時間、作業時間帯、作業量・生産量) また受注から納品までの具体的な流れを教えてください。 |
| 2 | 後継者育成 | 職人が考える輪島塗職人の魅力の把握 | 後継者の育成は震災前からの課題とされていました。まず、かつてはどのように後継者を育成されていたのでしょうか? 今後、後継者の育成していくためには何が重要でしょうか |
| 3 | | 若手人材にとって魅力的となるように改善するため | 輪島塗の記録資料は保存されているか。記録と共有の方法(デジタル化など)、職業ならではの困っていること(例えば手まめやかぶれなど身体面) |
| 4 | 産業支援 制度体制 | アーカイブスの構築と活用の把握 | 輪島塗の「産業」としての課題、は何だとお考えですか。また、いわゆる「輪島塗」と「それ以外のうつわや什器(じゅうぎ)」の生産割合はどの程度でしたか? |
| 5 | | 様々な視点(漆器組合、技術保存会、塗師屋さん)ヒアリングしたい | 輪島塗の技術や歴史を伝える記録資料はありますか?(現在の記録と共有の方法について) また、モーションキャプチャや3Dスキャンといった新しい技術で、輪島塗の技法を記録することに魅力を感じますか? |

| | | | |
|----|--------------------|--|--|
| 6 | ブランディング | 様々な視点(漆器組合、技術保存会、塗師屋さん)ヒアリングしたい | 「輪島塗」 或いは「輪島産のうつわや什器(じゅうき)」としてのブランド力を強化するための工夫として何が考えられますか？ |
| 7 | | 輪島塗の魅力独自性の把握 | 輪島塗ならではの強みや独自性は、どんな点にあるとお考えですか？(デザイン、各工程の技術、歴史など) |
| 8 | | 様々な視点(漆器組合、技術保存会、塗師屋さん)ヒアリングしたい | 輪島塗の作業工程の中で、職人として一般の方に見ていただける、あるいは公開できる作業はどんなもののでしょうか？また、公開が難しい制約があれば教えてください。 |
| 9 | | 輪島塗のまち「輪島」のおすすめスポット | |
| 10 | 給与待遇 雇用 福利厚生 | 職人が考える輪島塗職人の魅力の把握 若手人材にとって魅力的となるように改善するため | 「輪島塗職人なるとこんなによいよ」という PR ポイントを教えてください |
| 11 | | | 職人さんの収入や雇用形態面に関して、どのようなことが問題だとお考えでしょうか？ 収入に変動はありますか？ 輪島塗ドリームはありましたか、また今後ありうるでしょうか。 |
| 12 | | | 福利厚生面の課題として何かお気づきの点はありますか？ 職人ならではの困りごと、ルーティン(生活サイクル)の内容 |
| 13 | | | 職人さんのライフサポートとして、何が必要でしょうか？ (例えば、婚活支援など) |
| 14 | 販路開拓 収益性 | 様々な視点(漆器組合、技術保存会、塗師屋さん)ヒアリングしたい | 海外などに向けた販路の検討はされているか、販売先は場所(地域)、企業に特徴があるか |

【資料の引用および利用に関する注意事項】

本資料は、輪島塗復興協議会が実施した聞き取り調査および関係者との検討内容に基づき作成したものであり、特定の施策や効果を保証するものではありません。

本資料の全部または一部を引用・転載する場合は、必ず出典(輪島塗復興協議会)を明記してください。無断での改変、誤解を招く形での引用はご遠慮ください。なお、本資料の内容は作成時点の情報に基づくものであり、社会情勢や事業環境の変化等により変更される場合があります。本資料の利用により生じた損害等について、当協議会は一切の責任を負いません。